

本多現下の三大名著

法華經要義

四六判 六百數十頁
總振假名付
定價 金 參 圓

法華經の教義を整束し極めて平易懇切に講述せられ、今回特に闡天覽、供養覽、空前の好著なり。

日蓮主義の心髓

四六判 三百五十餘頁
總振假名付
定價 金 壹 圓 八 十 錢

法華經要義の姉妹篇なり、日蓮主義の精髓を領得せんと欲する者の必須欲くべからざる良書なり。

日蓮主義精要

四六判 七百餘頁
總振假名付
定價 金 參 圓 五 十 錢

十二篇に分類し教義信條の整束歸結を懇説せるもの、日生現下の妙悟紙上に躍如たり。

「教」發行所

近刊

| 價定一統 | |
|------|-------------|
| 一 年 | 金 貳 拾 錢 |
| 半 年 | 金 壹 圓 貳 拾 錢 |
| 一 年 | 金 貳 圓 貳 拾 錢 |
| 送料共 | 送料共 |
| 送料五厘 | 送料共 |

| 料告廣一統 | |
|---------|---------|
| 一 頁 | 金 貳 拾 錢 |
| 半 頁 | 金 拾 五 錢 |
| 一 頁 | 金 拾 五 錢 |
| 四 分 一 頁 | 金 五 錢 |
| 送料共 | 送料共 |
| 事之金前 | 事之金前 |

昭和四年十月廿四日印刷納本
昭和四年十一月一日發行
（第四百十六號）

製複許不

編輯象 磯 部 滿 事
發行人 鈴 木 日 雄
印刷所 東京府花原郡品川町南品川百八十一番地
電話 高輪六〇二四番

發行所 統一發行所
編輯事務ハ發行所ニテ取扱フ
電話 東京五一〇七一番

目次

| | |
|------------------|-------------|
| 法華經の正憶念(其一)..... | 本多日生 |
| 諸教の批判(完結)..... | 松村介石 |
| ○同上質議二信 | |
| 本多師に答ふ..... | 松村介石 |
| 記 事..... | |
| ○街頭布教記 | ○知法思國會第八回懇會 |
| ○大慈院開堂式 | ○各地教報 |

號月二十年四十三第

統一



法華經の正憶念（其一）

| | |
|-----------------|--|
| 目次 | |
| 一、信心と正憶念 | |
| 二、本佛の實在 | |
| 三、釋尊の救濟力 | |
| 四、題目と釋尊 | |
| 五、大慈大悲の題目 | |
| 六、正憶念と福德力 | |
| 七、菩薩行の應用 | |
| 八、佛と法僧 | |
| 九、四無の行法 | |
| 一〇、佛教に對する妄評と法華經 | |

一、信心と正憶念

信心は人間のあらゆる精神行動の中に於て根本となるものであつて、一番善い事には相違ないけれども、その信心といふ心持が間違つて居つたならば、形は信心に似て居つてもその實質といふものは信じて居ないことになるのである。その事は日蓮聖人も『顯勝法鈔』といふ御遺文の中に、

「信すといへども而も信せざるものなり」

と仰せられて居るので、法華經を信するやうであるけれども、その心得が違つて居つたならば、信じて

大僧正 本 多 日 生

は居ない人である、法華經の外廓から信じたやうに見えるても、その法華經の内容實質とその人の心懸どが違つて居つたならば、それは信じたことにはならない。それに續いて

「實教の文を得て權教の義を解するものなり」

と仰せられて、眞實の示されて居る法華經の文を讀みながら、その心得の方は權教方便以下に墮落して居る者があるといふことを書かれて居るのである。それがなか／＼大事な問題であつて、現代のやうに信仰を安賣して、何でも法華經の外部から頭を下げ

さへすれば信じたものだといふやうな事は、それも一種の解釋ではあるけれども、本當の宗教の信仰としては到底許容さるべきものではない。即ち日蓮聖人の所謂「信すといへども信ぜざる者なり」といふことになる譯である。

日蓮聖人は屢々仰しやるのであるが、「孝經を以て父の頭を打つ」といふことを、孝經は大事だといつて始終懐中に入れて居るけれども、時々その孝經を取出して親の頭を叩くといふ、それでは何にもならぬ。孝經の内容といふものは、親に孝行せよといふ事が書いてある、それを以て親の頭を叩くといふことになつたならば、それ程孝經を大事にして居つても何の價值もない。それは孝經の書を得て孝經の意を得ざるものである。チヨウドその如くに、法華經には本佛釋尊の尊嚴が説き切つてあるのに、そこに精神が向はないで他の事を考へて居つたとしたならば、それが孝經を以て父母の頭を打つといふことに

のこつては居るけれども、それは眞言系統の思想の影響であると申して差支ないと思ふ。

法華經の教義は何處から研究して行つても、左様な唯だ言葉さへ唱へれば宜いといふやうな意味にはなつて居ない。即ち實教の文を得て權教の義を解するといふことになれば、どれほど法華經を重んじて居つても、その心得が法華經の内容に一致しない限りに於ては役に立たない譯である。吾輩が斯様に説くことに對して、「そんな事は難かしい話だ」と言ふ人があるが、それは以ての外のことである。孝經なら孝經に書いてある一々文句は講釋が出来ないにしても、これは親を大切にせよといふ事が書いてある、親孝行の心得が書いてある書物だといふ位のことには知らなければならぬ。孝經々々といひながら、お香々の漬物の事でも書いてあるやうに思つて、親の頭をポン／＼敲るやうになつては、イクラ孝經を大事に持つて居つても何にもならない。お自我偈を讀

なる譯である。その迷ひが日蓮門下になか／＼除れきれない、いろ／＼の辯論を掲げて法華經の解釋を試みて「南無妙法蓮華經」と言ひさへしたならば法華經を信じて居るのぢや」と言ふ議論がなか／＼ある。それは日蓮聖人の御主張でもチヨウト爾う見える所もあるやうだけれども、それは本當に信じたことにはならない、唯だその言葉に「南無」といふことを附加へて居るさうである、法華經は唯だ言葉の教ではない、その内容を説いた教である。これが眞言のやうな行き方のものであれば、言葉だけのものであるから、阿とか呌とかいふ言葉を非常に重んじて言ふのであるけれども、併しそれは何にも内容は無いのである。妙法蓮華經は、さういふ發音にナニも尊さがある譯ではない、その内容に説かれて居る教に依つてそれが尊いといふことになつて居るのである。然るに法華經に於て言葉ばかりを大事に考へたといふのは、さういふ説き方も日蓮聖人の遺文に

んで居るといつたならば、自我得佛來といふことは釋尊の尊嚴が説いてあるといふ位のことには考へなければ、朝から晩までお自我偈を讀んで居りますといつて、どうしてそれが法華經を信じたことになるか。それは往昔あまりに經文の音讀の棒讀みの言葉を神聖視しすぎた結果、さういふ事が起つたのであるけれども、左様な事は教として甚だ意義の擡げものであるといふことを、先づ明瞭にして行かなければならぬのである。

それ故に信念といふことも結局は正憶念しなければならぬ事ナンである。正憶念といへば正しく法華經の意味合を覚えて、それを忘れぬやうにして時々想ひ出して有難く考へることである。正しく覚えてそれを忘れないやうに想ひ出して行くといふ事がなければ何にもならない。お自我偈の文々句々の講釋は出來ぬにしても、その精神は釋尊の斯ういふ有難い意味が説いてある、簡單に言つても釋尊はいつ

でも吾等を護つて下されて居る、すべての尊き方の
 中の根本を成して居る方であるといふ、その絶対の
 尊嚴を信解するといふことでなければ、法華經を信
 じたことにはならない、それが日蓮聖人の御主張で
 ある。然るに單に聖人が南無妙法蓮華經と唱へられ
 たといふことだけに拘泥つてしまつて、何にも知ら
 んでも南無妙法蓮華經を言ひさへすれば宜いといふ
 風に言ひたがる、それは日蓮聖人の『法華題目鈔』
 などによつていふ意味のことはある、法華經の意をも
 知らず義理をも味はずして、南無妙法蓮華經と一期
 生の間に只一遍なんど唱へたら宜いといふことはあ
 るけれども、それが所謂佐渡已前の教といふもので、
 後に訂正せられたものである。

若し果してさういふ意味の宗教が日蓮聖人の教で
 あるとするならば、これは實に低級なるものであつ
 て、將來到底人心を繋ぐべきものではない。教の意
 味といふものを明かにせずして、譯がわかつてもわ

からぬでも南無妙法蓮華經と云うて居りさへすれば
 宜いといふやうな事は、無智低級なる輩の間には或
 は歓迎のかも知れんけれども、將來ますます人智の
 進む時代の宗教としては意義を成さないものであ
 る。自分の信する相手方が何であるかわからぬ、ご
 ういふ人格者を信するのやら、人格者でないのやら
 もわからない、さうしてその人格者は自分で勝手に
 きめて來る、私は鬼子母神様を信するとか、イヤ帝
 釋様を信するとか、妙見さまを信するとかいふ風
 に、勝手な信仰対象を選んで、何處へでも法華勸請
 といふやうなことで南無妙法蓮華經を持つて行けば
 事が足りるといふやうな、多神散漫なる信仰を鼓吹し
 たものが法華經であり、日蓮聖人の主張であるなら
 ば、それは極めて低級なる宗教として前途は衰亡の
 外はないものである。そんなものは社會の一部には
 幾らかは残つて行く、いつの時代でも大本教や天理
 教みたやうなものを奉ずる人間はあるけれども、さ

ういふ人間の數は幾らあつても、その教の價値とい
 ふものは、本當の研鑽の上から見れば生命を喪つて
 居るものである。日蓮聖人の教は今日已後ますます
 人心を教化して行くべき前途ある宗教として考へな
 ければならぬから、さうするにはどうしても正徳念
 した意味に於て信念を説かなければならない。ドン
 ド法華や雜炊法華といふやうな事は全廢しなけれ
 ば、日蓮主義の前途は無いものである。

それは前に引いた「信すといへども而も信ぜざる
 者なり」實教の文を得て權教の義を解する者なり」と
 といふ聖訓を味はつて見たならばスグわかることであ
 る。或は又他の御遺訓には

「日蓮が弟子檀那と名乗らせ給ふとも、日蓮が判
 を持たざらん者はよも御用ひ候はじ」

と仰せられて居る。それは法華信者の特權として、
 私は日蓮の弟子檀那でございませと云へば、死後に
 どんな苦難に出會つても無事に通れるといふことが

ある、そこで地獄の閻魔様の前に引き出されて「私
 は日蓮の弟子でございませ」と言つて通らうとして
 も「貴様そんな事を言うても何を以て證明するか、
 お前の心得は法華經の意味にもならず、日蓮聖人の
 本當の教の意味にもなつて居ないぢやないか、日蓮
 聖人からは、此の頃は日蓮の判を持たない贖者が澤
 山あるから一々御調べを願ひたいといふ通知が來て
 居る、お前は日蓮聖人の弟子信者として許されて居
 る證據が何處にあるか、無いぢやないかッ」と言つ
 て、ガンと鐵の棒を喰はされる。日蓮が判を持た
 ざらん者は、閻魔大王と雖もよも御用ひ候はじと言
 はれる、その日蓮聖人の判といふのは、許可を受け
 ることである。その許可を受けるといふのは、今申
 すやうに法華經の意味合に正しく合したる信念でな
 ければならない譯である。

その法華經の意味合といふものはナニも難かしい
 事ではない。觀念觀法のやうな事をするならば、

それは智慧が及ばぬといふことにもなるけれども、人格の釋尊を有難く思ふことならば誰にでも出来る。どんな低級な宗教でも人格者を信するの
 で、念佛門でも阿彌陀さまを有難いと思ふし、基督教にしても神様を有難いと思ふのである。その人格者の考へ方が、法華經は阿彌陀經や聖書と比べてそこに相異があるのである。その法華經の教に基いたる本佛の尊嚴を意識信念することに依つて、法華經の信仰といふものは成立つのである。ところが甚だしきに至つては、法華宗は人格者を信するのではなく、南無妙法蓮華經を信するので法格である、非人格であるなどと言つた者があるが、さういふ事は最も激しい誤謬である。法華經の壽量品の何處を拜しても、人格者でないものを有難く思ふやうな意味は決して現はれて居るものではない。また日蓮聖人の「開目鈔」を拜しても、一切衆生の尊敬すべきものは主師親であるといふ人格者をお示しになつて居るの

いふことから考へなければならぬ。むやみに法華經を難かしい事のやうに考へたけれども、ナニも法華經はさう難かしい事が説いてある譯ではない。壽量品などでもナニも難かしいことはない、釋尊が一番有難い方であるといふことが説いてある、餘は附たりである。それが解らぬといふ筈はない、お自我偏を讀んで見てもスグ解る、我が佛に成つてから永いこと經つて居る、その間何處にも傷いて我は汝等を救うてやるものである、「我も亦これ世の父、諸の苦患を救ふ者なり」と説かれて、お前等の親としていゝの苦難を救ふものであると言はれる、これより易しい説き方といふものは無い。これが解らぬと言つたならば、人間として親が有難いといふ事も解らないことになる。むやみにさういふ意味合を難かしかるといふことは、言葉の濫用であるこれが。哲學的の玄々微妙なる眞理を考察しなければならぬといふことになれば、難かしいといふ事もあるけれど

であつて、今日に於てモウ明瞭に研究し盡されて居る事である。何等日蓮教學を研究せざる千ヶ寺法門みたやうなものに、唯だ題目を唱へさへすれば宜いといふやうな者があるのであるけれども、それはモウ舊い誤謬であつて、既にはやく解決されて居るとナンである。學ばざる者が盲目的にやつて居るだけのものである。それは日蓮聖人が「三澤鈔」に、「開目鈔」を以て自分の眞實を顯はしたと書かれたことから、「開目鈔」に想を致せばスグに判ることである。さうして一切經中に壽量品が無ければ人に神の無いやうなものだと言はれる、その壽量品は何だといへば、本佛の顯本を説かれたものであるといふことを、明瞭に「開目鈔」に高調力説せられて居る次第である。

だからその正憶念の意味合をよく考へて、法華經の事を正しく考へなければならぬ。さうするに教の内容に入つてさういふ事が説かれて居るかとも、人格者の有難いといふことに感激するといふ事は情操であつて、ナニも知識に關することではない。花を見て綺麗だと思ふのも、別嬪を見て美しいと思ふのも、親が親切にして呉れて有難いと思ふのも、饅頭を食つて美味いと思ふのも同じことである。本佛の難有さがわからなかつたら、饅頭を食つて美味いといふ事もわからなくなる。それが難かしいなどと云ふのは、イヤ饅頭を食ふのはナカ／＼難かしいものぢやと言ふやうな話で、實に愚論である。何にも知らずに唯だ聲ばかり、蛙が鳴くやうな事をやるのが良いなどといふのは、實に低級なる宗教と謂はなければならぬ。これは傳教大師も喝破せられて、法華經の意味を心得ずして唯だ法華經を讀んで居るのは蛙が鳴いて居るやうなものぢやと言はれて居るが、さういふ批判が大事ナンである、今後はどうしても其の方を能く心得て行かなければならぬ。であるから何にも知らんでも讀みさへすれば宜いと

いふやうな思想は、傳教大師も日蓮聖人も御容しな
さらないのである。

それ故に日蓮聖人の當時に於ては、片海の圓智房
の語が御遺文の中に出て居る、彼は朝から晩まで法
華經を讀んで居つたけれども、彼は決して教はれな
いといふことを日蓮聖人は斷言せられた、果して圓
智房は非常な氣の毒な状態を示して死なれた、地獄
の相を現じて死んだと日蓮聖人は書かれて居る。即
ち法華經を朝から晩まで讀んで居つても、法華經の
精神に適はない者は地獄に行くといふことを論じた
のが日蓮聖人の議論である。また法華經を讀むと
睡も還つて法華の心を死すといつて、法華經の讀め
方が間違つては役に立たぬといふことを論じたの
が、天台教學の主旨になつて居る。それよりもモツ
ト峻嚴に論じて行つたのが日蓮聖人であるから、ご
んな風でも構はん、法華經が有難いと言ひさへすれ
ば宜いといふやうな教へ方が出て來る筈がない、そ

の有難いと思ふ意味合が法華經の經意に合致しない
限りに於ては駄目である。それをむやみに難かしい
といふやうな事を言つてごまかすのは、一種の邪論
である。心を本當に落つけて法華經を正憶念すれ
ば、この位有難い意味合は無いといふことがわか
る。(以下次號)

如來の法は不可思議微妙の功德を
具足し成就したまへり、
教戒の所行 安穩快善なり

法華經卷第八

諸教の批判

低級の宗教

低級の宗教とは、怎んな宗教を謂ふのか。天理教
や大本教や不動や觀音や其他諸神教や諸佛敎の中で
専ら御利益を主として説く宗教其物を謂ふのであ
る。

佛敎でも耶蘇敎でも回敎でもソクラテス敎でも皆
御利益を説いて居る。其内儒敎には此御利益説法は
一番に鮮い。然し其れでも「録其中に在り」と云ふて
居る。其れは此等の宗教なるものは唯り高等の連中
にばかり説くのでなく、一般の民衆に説くのだから、
先づ其等の者を諭し導く爲め、是れ亦た止むを得な
いこととせねばならぬ。然し佛敎でも、耶蘇敎でも、
御利益が主でない。即身即佛だ、愛だ義だ、道だと
説くのが本筋である。

然るに幾多の偶像敎は勿論の事彼等前途にかゝる

松村介石

(前號の續き)

諸宗教即ち専ら御利益を説くもの、又は其御利益を
信するものは、僅か五厘か一錢かの御養錢を投じて、
家内安全、息災延命、商賈繁昌と祈り、そしてトン
ト夫婦喧嘩を慎み、衛生に注意し、一生懸命に稼ぐ
と云ふやうな、道德方面に志さず、互に我儘を云ひ
張り、身自らは不養生をなし、懶けて遊んで居て、
其れで五厘か一錢のはした金で神や佛を買収せんと
して居るのだから不心得も亦甚だし。

然るに今日一廉の連中が其宗派に屬し、其本尊の
前に帽を脱し、頭を低れ、拍手以て其御利益を祈つ
て居る。噴飯せざらんと欲するも能はずである。
阿彌陀や、觀音や、不動尊は、前述の如くである
が、然し其れは方便としてだから先づ可としても天
理教や、大本教、其他諸神佛に屬する御利益宗は、
本筋より觀ると低いもので論ずるに足らぬ。且つ國
常立の尊や、天理王の尊を本尊として居るやうだが、

其等の諸神を實在物とする權威は何處に在るぞ。況んや今日に開け来る心靈的現象を利用して人を驚かし、其處に權威があると謂ふに至つては知つて謂ふものは悪むべく、知らずして有難がるものは氣の毒なりと謂ふべきである。

新宗教家の續出

近頃、我國に新宗教が續出し始めた。曰く何々教々々々、々々々々、而して堂々と署名して色々の説が雑誌に載つたり、書物になつて出て来る。予輩は成るべく其説や其書物を讀む様にして居るが、怎も敵本で、本物と思ふものが甚だ尠い。中には至極眞面目なものもあるが、然し其他も宗教や宗教歴史に就ては無學で、素人を驚かすことは出来やうが、女人に笑はれるものが多い。

先日も横須賀の或處へ講演の依頼に應じて出て行つたところが、海軍の或將官が一人の老人を紹介して「此は先生と同じく道は一なりと唱へ、此に新宗教を唱へて居る方である」と云はれるから會つて見ると、色々其の意見を云ふから、其れは其の通り

閑題一言

さて、佛教も基督教も神道も儒教も低級宗も新宗教家をも、思ひ切つて批評して來た。或は破壊して來た。然し予輩の所願は批評ばかりでない。破壊ばかりでない。之れに就て一々予輩の意見を述べたいのである。即ち建設したいのである。

歸の頭でも、假設神でも、假設佛でも、人作物でも、迷信でも、妄想でも、苟くも眞實として之を信じて居れば其れで救はれるのであるから、決して之を笑ふたり、破壊したりしたくは無いのである。然し知識學問の開け来る今日では其れが六ヶ敷い。否、續かないからモウ其説き方を變へねばならないでないかと言ふのである。而して然らば何う説くのかと云へば、恚う説きたい。恚う説くべしと謂ひたいのである。佛教やキリスト教や神道や儒教を打ち毀すのでない。之を立て直したいのである。

然し其れにしても從來の諸宗教の諸説を今猶其儘に信じて居る方にとつては氣の毒である。殆んど忍びないと思ふほどである。其れは予輩も其苦しき經

至極同意である。然し道は一なりと云ふ事は古今東西を通じて色々の哲學者や色々の宗教家が随分論じたものだが、誰某の其論や、誰某の其説を讀んだかと問ふと、何も知らない無學の徒であつた。そこで非常な卓見の様に云ふから、少しく馬鹿らしくなり、「失禮だが、遼東の豚といふことがあるからな」と云つて歸つて來た。

一體、今日新宗教の主唱者など唱へて出て來る人は、十分に今古東西に亘る宗教や其歴史や其人物を學び、其の上己れ一個の見識と體驗とを積んで、出て來たものであらねばならぬ。博士であらうが、政治家であらうが、著名の士であらうが、苟も堂々と署名して雑誌に載せたり、書物に出す位の志あるものならば、宗教の各方面に明るきのみならず、又其の唱ふる宗教を悟得し、之を體驗し、之を心證し、之を味ひ、之を樂しみ本當に、之を有難がつて居るものであらねばならぬ。然るに學思驗の此の三方に缺くるところありながら、尙且つ大學者の如く吹聴して出て來るもの、如きは寧ろ世に對し、人に對して失敬である。

驗を持つて居るが、今迄本物であると思ふて居るものが偽物であると判つた時ほど自失、落膽することはないのである。而して其結果、全く無宗教になり、従つて無道德になり、自暴自棄に陥ることが無いではない之れは予輩の友人の中にも其例が幾等もあるのだから、實を云ふとこんな事は云ひたくないものである。然しモトそんな姑息な態度をとつて居ることが出来ない。其れは今のまゝで置くと、日本人の全體が皆な無宗教になるか、左もなくば益々迷信に深入るばかりであるからである。故に破壊せられた方も失望するに及ばぬ。諸君の迷信の代りに予輩が一つ正信を與へてあげるつもりであるから。

今日の讀賣新聞記者の言に依ると連日連載する此「諸教の批判」に對して駁撃文の到着して居ることが山の如しとある、實に愉快に堪へぬ。該記者の御説の如く目下の日本人が宗教に睡つて居ないことが分つて有難い。

然し其れならば随分諸宗教者を怒らせたであらう。彼等に信仰上の煩悶をも惹き起させたであらう。そこで一寸茲に我が詰論を云つて置くから、其んな

に神經を突らせないやう希ひたい。即ち前に云ふ通り、予輩はウント一度は既成宗教を破壊する。然し破壊が目的でない。建設が目的である。而して之れは知識階級の人には分つて居るが、一般の讀者には分るまいから云ふて置くが、凡そ宗教を説く時には其説法に四條ある。一に曰く奪ふて與へず、二に曰く與へて奪はず、三に曰く彼を奪ひ此を與ふ、四に曰く奪はず與へずと是である。

そこで今は奪ふて居る最中だが直ぐに與へる時が来る。而して其與へる時が来ると、佛敎もよろしい、耶蘇敎もよろしい、神道もよろしい、儒敎もよろしい、否、低級宗もよろしい、一切の偶像敎も皆よろしい、と謂ふところまで来るのであるから、ソウ遠に怒つたり煩悶したり、落膽したりせずして待つて居てくれ給へ。

耶蘇曰く、予は豫言者を棄つる爲に來らず、却つて之を成就せんが爲に來れりと。然り何事でも何物でも破壊する丈けなら易い。批評する丈けなら誰にでも出来る。人の缺點や行動を非難する丈なら大勇氣を以て之を行ふことが出来る。然し其れなら君に

は如何の建設的、積極的意見がある乎、君の行動は怎うだと云はるれば、黙さねばならぬことが多い。が、予輩は开んな無責任な態度はとらぬつもりだ。

知識と信仰

モ一少し破壊の必要がある。能く雜草を拔除して置かねと、眞實の種を蒔いても十分に生長せぬからである。

宗教家若くは其信者は動もすれば即ち謂ふ、信仰と知識とは違ふ宗教は理窟でない、其以上のものがある。私には學問知識がない、哲學も知らぬ、神學も知らぬ、歴史も知らぬが、たゞ正直に信仰するばかりであると言ふ。然し其れが寔に可笑しなのだ。學問知識を通さずして怎うして釋迦や耶蘇を知つたのだ。

彼れお経やバイブルに在ることを眞實間違ひ無いと信するのみと謂ふが、怎うして其のお経やバイブルの存在を云つたのだ。之れ皆知識より出て居るのではないか。畢竟するに知識を無視しては信仰も成り立たぬことゝなるのである。

彼等は又謂ふ。法華經が釋迦滅後五六百年後に出來ようが、ヨハネ傳が基基滅後二百年頃に出來ようが一向構はぬ。つまり釋迦や耶蘇の體験と其の信仰とを傳へたものだから、之を釋迦や耶蘇の説いたものとするも差支へない。又た釋迦や耶蘇につける奇蹟的記事が、後人の作であらうが、一向差障りない、釋迦は法身と合し、耶蘇は神と一になつて居る、故にこれを法身其者、神其者と説いても可いではないかと。然し予輩の聞くのは其れではない。歴史上の事實如何である。然るに此返答を曖昧にして置いて、直ぐに説法するから、其處に大弱點を暴露して居るぞと云ひたいのである。

つまり宗教は知識以上としても既に學者が研究して、歴史上の事實となつて居ることは、之を否定することは出来ない。故に先づ此の事實を承諾するか承諾せぬかに明答を與へて置いて、而して其の説法に出でよと謂ふのである。

知識を無視しては信仰は成立せぬ。然し知識だけでは眞の宗教とならぬ。科學は事實を土臺として立證するもの、而して哲學は科學を土臺として推理す

るものである。然し科學は勿論、哲學も、與へ與へると、その何物何故を續けて行くと、結局は返答の出來ない解らないものとなるのである。そこで信仰と云ふものが起つて來る。

此科學や哲學ばかりで論ずると有神論も立てば、無神論も立つ。汎神論も立てば、一神論も立つ。而して更に此二者を合して汎神的一神敎と謂ふものも出て來る。

今日學者々と謂ふが、今日の學者などに分つて居ることは海濱の一砂のみ。燭を暗中に點すれば其の光のとゞく處丈けは明るい。而も其以外の周圍は眞暗で何物があるかサツパリ分らぬ。然し人間と云ふ奴は分らぬと云ふだけでは満足が出來ぬ。いつても次から次へと穿索して行き、此は何物か何故かと尋ね、而して其處に己れ一個の信仰なるものを起し來る。故に眞の信仰なるものは今日開け來る科學や哲學の上に立つものであらねばならぬが、然し今日の知識丈では宗教を生じない。されば科學哲學の上に一步を進めて信仰となるのであるが、更に其の信仰が其の人の宗教となるには當に其の信仰の如何を

知るのみならず、信仰を味ひ其信仰を樂み、其信仰を體驗して居るものであらねばならぬ。然るに世には一塵の僧侶や牧師でありながら、其れが唯だ知識上ばかりに止り、其れが己れの生命となつて居らぬものが尠くない此等は眞の宗教から謂ふと門外漢である。

道徳と宗教

宗教家には其の説くところに反して、案外にも不道徳家が多い。消極的に云ふと、案外にも立派な人間が尠い。これは一體どういふ譯か。佛教は他力と自力、キリスト教は信仰と行狀、此の兩面を説く。而して佛教は謂ふ「とても見性成佛など云ふやうなことは、凡夫には六ヶ敷い、故にたゞ阿彌陀に頼れよ、さらば如何なる罪障も皆消滅する」と。そこで自然と修徳に骨折らぬ様になるから小俗の人間に墮して了ふ。キリスト教は云ふ「我等は母の胎内より罪人として生れて來て居る。故にとても自ら救ふことが出來ない。たゞキリストの十字架に縋るより外はない」と。そこで人格上には弱い人間となつて了

ふ。

然し其れでは一向價値の無いものとなるから、更に自力の行ひを説き、佛教では難業苦行や鍛練をやらせ、基督教では種々と徳義の勵行を勸む。然し佛教は汎神教より出て居り、汎神教の究極は善惡無二、醜美一如となるのであるから、凡俗に向つては諸惡莫作、衆善奉行など、説くもの、本人は之を卑しと觀るから、知らず／＼不品行と怒張りの人間となつて反省せざるに至る。又基督の基督教は、此の道徳の方面に於て實に殿しいものであつた。汝の目罪を犯さば抜きて之を棄てよ、とまで説いた。而して贖罪などのことはサツパリ言はなかつたのである。然し後から出て來た保羅は、己れがバリサイ宗で懲り／＼して居るところより、主として信仰と贖罪とを説き、今日に傳はつて居るバイブルは、多くその系統に屬して居るので、今日の基督教者は、これ亦た知らず／＼此の修徳の工夫を怠る様になつて了つて居るのである。

然し何と云つても、不道徳はいけない。宗教者であらうが、無宗教者であらうが、有神論者であらうが、無神論者であらうが、名利に驅られたり、物慾に支配せられたり、不品行したり、不埒を働くやうな下劣な人間は論するに足らぬ。

そこで然らば如何にせば其の道徳家になれるか。其教には何宗が可かと云ふに、諸宗皆其れ／＼の流儀を持つて居るが、予輩は此徳教に於ては矢張り儒教が一番に可と思ふ、殊に其實行を主とする點より、陽明的儒教が可と思ふ。そこで先づ道徳即ち精神修養の方面より入れと主張する。予輩は求道者に向つて、道會四書と、王陽明の詩集とを讀ませ、之を講義してやるやうにして居る。然し前云ふた通り、徳教丈で宗教まで行かすば、無根人となるから、必ず宗教を説くのだが、宗教としては、矢張り基督教が第一であると思ふ。勿論基督教も前云ふ通りだから、其枯枝や作り花や知識に誤つて居るものは探ることが出來ぬ。然し其の神を父とし君として事へる其の孝情と、忠情と、其生命的熱情に至つては兎ても神儒佛の及ぶところでないと思ふ。尤も熱情丈けより云ふと低級宗教には其れが餘るほど十分あるも、之れは前云ふ通りである。然し此の儒、耶ともに其の

道ふところ、教ふところが多く人間間に局して居て、宇宙大に及ぶことが尠いが、其處に至ると佛教の方が偉い、佛教にも色々ある。然し其の禪の大悟に至ると宗祖を呑み、經典を呑み、國家を呑み、世界を呑み、宇宙を呑み、益に眞如其物となつて現れ來るのだから偉い。此の大悟はなか／＼容易でない。そこで世に禪を學んで悟つた積りで居る者は、大抵野狐禪か左もなくば素人向きの應用禪に陥つて居るものだ。

靈的經驗と其種類

諸宗教とも從來は其證據(テスチモニー)を主として知識の方面において論じて來た。然るに近來になつて所謂靈的經驗なるものを云ひ出して來た。前に云ふ如く、科學と哲學だけでは、諸物を解決することが出來ない。怎うせお仕舞には分らなくなるからだ。故に是非とも其上に信仰なるものが起つて來ねばならぬのである。然るに其信仰で進んで居ると茲に一種不思議な現象を體驗する。之を靈的經驗と謂ふ。

即ち神を在るものと信じて進んで居ると、其神を身自ら感ずるやうになる。或時は吾實眼で見ることもある。或時は心の内で其姿を拜することもある。又或時は其眼と同様に、同じく實耳、心耳で、其聲を聞くことがある。而して祈禱すると其祈禱に顯著なる感應のあることや、怎うしても神の御指導若しくはお救ひであると思はれるやうなことを體驗する。而して之れは事實である、實際である。

然るに其れに二種類がある。一は眞物で、一は外道である。眞物は至誠若くは道念より發して之を體驗するもの、外道は唯だ奇蹟若くは異能其物に接して有難がるもの、所謂神降とか、御神託とか、お告とか、お筆先とか、其他今日に聞ける神靈現象の種々相を執へて、其處に其不思議を示し、其れ見ろ此に神が御座る、此に佛が御座る、此に大靈の力がこの通りであると立證して、此に其信者を作るのである。

今日我國の處々に流行して居る今神様や、今佛様の遣つて居るのは皆此外道に外ならぬ。否、從來の既成宗教も皆此の外道を遣つて其信者を作つたもの

ぬ感に打たれた。因て其後は少し謹んで居たが、復た理窟に合はぬことを云ふから、更に暴言を吐いて寄宿の室に歸つて來ると、其夜俄に予輩の靈魂が覺醒し始めた。而して切りと予輩を責める。曰く、汝は眞面目なものを愚弄するか、又如何に間違つて居ても彼等は誠に之を信じて居るのである。故に此の誠意に對して暴言を吐くのは汝が善くない。又汝は眞に神を無いものと思ふか、基督教の謂ふ神は汝が儒教より學んだ上帝ではないか、又汝の内心に顧みよ、恥かしいこと、汚いこと、悪いことが幾等もあるではないか、故に若し神が存在して居るなら、汝は何と申譯するぞと。此に於てか、予輩は此靈魂の覺醒と同時に現に神が我頭上に出現したまふ如くに思はれて堪まらぬから大改悔の上、二階に居るクリスチャンに祈禱して貰はんと登つて行くと、丁度其時數人のクリスチャンが集まつて、未信者殊に予輩の爲めに祈禱會を開いて居るところであつたので、予輩の告白と共に一同わつと泣き崩れたのであつた。

今より三十年以前にもならうと思ふ。井上哲次郎、

である。然し本當の連中は之を遣りながらも、「姦惡なる世は徴候を要む」と述べ「これは凡俗を導く方便である」と説いて居る。

予輩の靈的經驗

予輩には怎んな靈的經驗があるか。他事と同じやうに、此靈的經驗にも多少と濃薄との別がある。然るに予輩には此が多濃なのである。

學者は此靈的に多濃なるものを指して神秘派と謂ふ。此神秘派は學ぶよりも思ふ方だ。知識を追究するよりも祈禱する方だ。

予輩が基督教に入つたのは此靈的よりである。之れは拙著『信仰五十年』に委しく書いて置いたが、予輩が十八の時、横濱の宣教所のバラ學校で、毎夕此のバラ氏のやる聖書の講義に對して愚弄半分の言を吐いたところ、或朝バラ氏を尋ねると居ない。何處かと探して居ると一室で聲がする。叩いても返辭がないから、耳を澄して聞いて見ると、切りに予輩の名を連發して居る。始めて知つた、之れは予輩の爲に祈つて居るのであつた。此時には何とも云はれ

元良勇次郎兩君等が主催で、帝大の邸上で、宗教家と教育家の懇談會が開かれた。而して其時予輩も其招待に預つた處が此時分丁度ゼームスが『宗教的經驗の種々相』と云ふ名書を著してから間もないことで、元良君が予輩に向つて、此靈的經驗を要められたので之をやつたが、其時予輩の前に近角常觀君が、其最近其身に起つた見佛の靈的經驗を語られたから、予輩が遠慮なく、近角君に對し、其れは靈的經驗の初歩であると云つたやうに覺えて居る。

然り、前に云つた横濱での靈的經驗の如きは極めて初歩である。予輩は其後五十年間引續いて此の神に祈り、此の神の御指導を仰いで居るが、殆ど此靈的經驗の連續である。而して今日では段々と奥へ進んで來た。今其大なるものを擧ぐるなら、前述の第一回。第二回は病氣にかゝつて進退谷つて神に死を要求した時に得た經驗。第三回は備中高梁で牧師をして居た時大リバイバルが起つた時に得た經驗。第四回は鎌倉に引込んで歴史を研究し、前途何を爲さんと考へて、海濱の砂上を歩んで居ると、俄かに天外に聲ある如く覺えて、汝は何を考へて居る、汝

は夙に一身を宗教に擲つと誓つたもの今更己れの名利を追つて何處に何くぞと叱られ、茲に道會を起すに至れる經驗。而して今日では此神が君でなく、全く慈父の如くになり、眞に生ける慈父に事へて居る即ち連續的靈的經驗を持つて居るのである。

予輩は徒に自身の事を吹聴したり、之を誇るのも何でもない唯諸宗教諸君の中の其れが聞きたいのと、又之を云つて置いて宗教の歸着するところを論じたいからである。尤も此靈的方面はあまり云ひたくないものである。之を云ふと、御利益宗の迷信家や、心靈的の外道の業が出て来て、朱を奪ふからである。

宗教上、神が主として要求し給ふもの

知識を無視しては眞の信仰は成立たぬ。然し宗教上、神が主として要求し給ふものは知識よりも至誠である。他宗教よりも色々之れが例證を擧ぐるこゝが出来ようが、先づ基督教丈で云ふならばペテロ、ヤコブ、ポーロ三使徒に對する神の態度である。ヤコブは純基督教を奉じて居たので、勿論信仰の必

要をも説いたが、然し行爲の伴はざる信仰は空である

と説いた。ポーロは又行爲の必要を認めたと説いた。神に義とせらるゝは行爲でなく、信仰であると説いた。而してペテロは此間に介つて一寸困つた様子で、猶太人と異邦人とに對する態度を異にして居た。そこでこの三人の間に議論が起つた。然し神は其の意見や議論の相違に關せず齊しく双方を愛し、之れに聖靈を下し給うた。其れは其意見や議論に對してはなく、其の神に事ふ至誠に對してである。即ち至誠は皆齊しく持つて居たからである。又宗教改革の三傑ルーテル、カルビン、ズィングリーに對しても同じであつた。彼れ三傑は議論し乍らも、兎角一緒に傳道した。然し、ルーテルはズィングリーと其の意見を異にした爲めズィングリーの握手せんとした時之を拒絶し殆ど絶交を宣言した。カルビンも亦其神學に重きを置き更に此二人とは其意見を異にして居た。然し神の待遇は此の三人に對して同一であつた。其れは彼等も亦齊しく至誠の人であつたからである。

神が知識上の意見で人を採り給ふとならば、極め

て少數の人の神で、萬人の神ではない。神は知識を獎勵し給ふ。然し其萬人を採り給ふのは主として然らず主として萬人の心の裡に在る至誠其物である。之を三使徒も三傑も未だ悟つて居なかつたらしい。

神が偶像教者、若しくは低級宗教者に對し給ふ態度も亦同じ事である。

偶像教者若しくは低級宗教者は其の知識の缺乏より、縮の頭を眞の神、若しくは佛と信じて拜んで居る。而して之れは馬鹿々々しい事である、然し其の靈的經驗を聞いて見ると、彼れ大知識大高德の其れと同じやうなものを持つて居る。此れは一體怎ういふ譯か。其れは一知識上より觀れば笑ふべきである。又氣の毒とも謂ふべきであるが、然し其の自ら神若しくは佛に對する至誠には、彼れ大知識大高德と少しも異つたところがないからである。

神は何處にも在し給ふ。故に縮の頭に對して拜んで居やうが、阿彌陀や、觀音や、不動の假佛假神に對して拜んで居やうが、其の拜んで居る處には必ず神が御座るのである。故に至誠さへ我にあれば神が之を受納れ給ふのである。

尤も繰返して謂つて置くが、其れだからと云つて、縮の頭で満足してはならぬ。神は無學者を憐れみ給ふとも、褒め給はぬ。迷信者を可愛相に想ひ給ふとも、其れで可とは云ひ給はぬ。即ち其信仰は學問知識の進歩と共に、崩れて行くものであるからである。

又繰返して謂つて置くが、幾等熱信であつても、眞赤になつても道念を離れ、單に己れに對する御利益を念するものではない。否、縱ひ御利益を念するにしても親の爲めとか、君の爲めとか、國の爲めとかで、之を念するものであらねばならぬ。即ち神は至誠を求め給ふからである。

予輩の神觀

世に一神教と汎神教と不可思議との三種がある。而して此三種とも知識上丈けでは行詰る。

一神教は神が天地萬物を造つたと謂ふ、左れば何物で其を造つたか。答は幾等重ねても零である。無より有は出て來ない筈。左ればつまり神があつて、其神より其有が出て來たとなるから、矢張り此萬有

が神となることになつて行詰る。然らば萬有が神か。萬有が神なら味増も糞も皆神となる。开んなものも拜めるかとなるから、此れも亦行詰る。そこで不可思議論が出て来る。つまり有限の人が無限の神を識することは出来ない。相對で物を識る人間が絕對を思議することは出来ない」と云ふ。而して終に不可解と解釋して行詰る。

左れば天地萬有は何物ぞ。サツバツ皆解らぬかと云ふに左様でない。たとひ終には行詰るにせよ、此天地萬有が偶然に出来て、盲目的に動いて居るものとは思へない之に法あり、道あり、智慧あり、意匠あり、即ち怎うも心があるやうに思はれる。そこで科學と哲學とに一步を進めた信仰となり、此の信仰より此心ある神を認めることになる。

神が人格か、人格でないか。此議論も亦行詰る。此の廣大無邊の神を小さな人格にして仕舞ふのはへんなものだ。其れは人間を萬有中一番偉いものにした手前味噌である。然し不人格では拜めぬから、汎神教では止むなく佛や如來も引張り出して來て之を拜む様になる。又人格として拜む一神教ですら怎う

の御姿が拜まれ、馬の啼く聲、水の流るゝ音を聞いても、其れが神の御言であると覺えるので有難いこと限りなしである。

神が萬物の上にあるか、其内に在るか、开んな知識的議論は先づ第二にして置いて、兎に角予輩は此の靈覺で神に事へ、又萬有に接して居る。

諸君或は問はん、如何にせば其靈覺を得ることが出来るか。然し其方法は怎うだと之を一言で云ふことは出来ない。而して其れが即ち靈覺なのである。

眞如と云ふ原字は英語で *眞如* 即ち『こんな物』となる相であるが其意味は能く知らぬ。然しこんな物とは面白い。其本體を聞かれても、口では云へない。然し身自らは確に之を悟覺してゐる。故に『こんなもの』とより云へない。我が魂の存在は確に之を認識して居る。然し其魂は『こんな物だ』と聞かれば、矢張り『こんな物』より外答へることが出来ない。佛教でも、基督教でも、一神教でも汎神教でも、つまり悟得自知するところに大極意があるのである。

しても萬有を神の外に置くことが出来ないの、さしてこそ神の遍在性を説くやうになつて來る。恁んな事は識者には夙に分つて居るのだが、一般の讀者の爲に茲に一言して置き、而して予輩の神觀を陳べたいのである。

予輩も五十年間の宗教生活の中には、可なり宗教上に於ける學問知識の方面に悩み、悩むと同時に、一躍其上に信仰を進め、身自ら此神を靈覺せんと骨折り、そこで得たところの神觀は怎うである。

海老名、井上兩君の議論は一神教と汎神教とに於ける古い議論で、其處に何等新しいものを見出さない。其れよりも兩君が今日得て居る、信じて居る、靈覺して居る其神如何を聞きたいものだ。予輩は知識上此神を人格と斷定しない。然し一神教たる基督教より入つて、此神を人格と信じ、之を拜し、之れに感謝し、之に祈禱して居たところが、今日では此神が前述の如く、恰も慈父のやうになつて仕舞つた。そこで又此の萬有に對する靈覺如何と云ふに、勿論之を神と思ふことは出来ない。然し星を觀ても其處に神の御光が現はれ、花を見ても其處に神

一寸一息

一寸こゝらで進路を轉じて申たいことが二ツある。

さて字數と回數とに註文があるのでナカ／＼骨が拆れるが、然し先づ大分奪つたり與へたりして來たつもりだ。即ち破壊したり建設したりして來た積りだ。而して前に約束した事を大半は成就したつもりだ、尤もまだ結論にはならぬ。

そこで一息して言ひたいその一ツは、先づ駁撃者に對してである。已に二人まで此欄内に現はれて來た。而して續々と予輩の手許まで讀賣新聞宗教部の方より送り來て居る。然し怎も一ツ力瘤を入れて相撲つて見たいと思ふのが一つもない。そこで孰れも偉い方ではあらうが、實は閉口して居る。予輩も己徳であらうが、幕の内とは云はぬが、二段目位はとるつもりだ。然るにへろ／＼した素人相撲に出られはとる氣になれぬのも無理ではあるまい。イヤ之れは失禮した。予輩は怎も丁寧な言語を使ふことが不得手で困る。心で思ふ事を其儘云ふので、言語の

上で人を怒らせることがある。然しその代り予輩に向つて、狂父爺でも、高慢野郎でも、何でも構はぬ云つて呉れ給へ、少しも怒らぬから。そこで無理でもあらうが、せめて二段目位に出てほしい。幕の内が出て呉れ、ば猶有難い。尤も讀賣新聞に出た丈の分には御答へする。然し其れは云ふ丈の事を言つて仕舞つた後にする。之れが一ツ。

モーツは此諸教の應用、即ち活動に對してある。諸宗教の祖師は教育家として出て來たのでない學者として出て來たのでない。皆孰れも人を思ひ、世を思ひ、國を思ひ、之を救はんが爲めに志士仁人として出て來たのである。然るに爾來其教へを奉ずるものは往々にして、此の祖師の念願を離れ、而して經文の註釋や、教義の議論に没頭して、此の人を思ひ、世を思ひ、國を思ひ、其諸教を實際に應用せしめて大活動を開始することを忘れて居る。是れ予輩が今日の宗教家に向ひ、一言云はざるを得ざるゆえんである。故に之れより進路を其方面に轉することゝする。

宗教家と人間社會

り面白く思はなかつた。然し僧侶から出た一人が衆を代表して之れに答へ、先づ後藤閣下と冒頭して、閣下が臺灣又は滿洲に於て擧げられたる政績は何うの斯うのと切りに頌徳表を奉つた。予輩は馬鹿々々しくてたゞならなかつた。ソコで後藤と呼び捨てにしたかつたのだが、一寸遠慮して先生と呼び、「先生そんな事は問題でない、元來諸宗教の本職がそれなのである予輩の如きは此四十年來其「政治の倫理化」を絶叫して居るのだ。先生の今日此に目醒めて下さつたのは有難い。予輩には精神があつても運動費がないのだ。只困るのはそれだ。然るに先生のやうな有力者が此運動に加はつて下さるのは嬉しい」と云つたら、一寸怒つて何か云ひ出したが、モー予輩は好い加減にして置くと、流石は寛先生だ。寛先生が直に予輩に次いで又た後藤氏の言に一撃を加へられたので、此會は遂に有耶無耶になつて散會して仕舞つたが、其時予輩は此等の宗教家の重立を見て物の哀れを感じざるを得なかつた。

結 論

前述の如く宗教家の本職は人間社會を救ふに在る。天國に救はるゝことばかりを考へて居てはならぬ。極樂往生ばかりを念じて居てはならぬ。更に進んで其眼光を此人間社會に放ち、其手段を此人間社會に伸ばさねばならぬ。ソコで此人間社會を支配して居る第一の勢力は政治であるから、先づ此政治と接觸せねばならぬ。先づ此政治を指導せねばならぬ。即ち先づ政治家を救はねばならぬ。

何故に今日の政治がこんなに腐敗墮落したか。先づ政治が悪いからだ。而して其の政治の悪いのは其の政治家に人物が居ないからだ。而して其政治家に人物の無いのは、彼等に宗教道德の素養が無いからだ。而して彼等に宗教道德の素養の無いのは、今日の宗教家が彼等を教へず、却つて彼等に追従するからだ。

一昨年であつたか、後藤氏が政治倫理化とか何とか唱へて、運動した時、諸宗教の重立を呼んで御馳走して其席で「さて諸君這度こういふ運動を始めた、是非とも諸君の賛助を戴きたい」といふやうな挨拶を爲したが、其態度が如何にも傲慢であつたので、餘

お約束の三十回も、いよ／＼結論に近づいた。ソコで一ツ繰返して結んで置きたいが、予輩は好んで破壊したくないのである。欣んで悪言を放つのでない。グ／＼して居ると日本國民が段々無宗教になり、従つて無道德になり、一身を亡ぼし、國家を滅すことになるからモー黙つて居れぬからだ。

左れば諸宗教者諸君は、前述にかゝる予輩の言に接して、何んと考へ給ふか。一向手應がない。松平俊子氏や、坂田博信氏の辯駁文と云ふのが出て來たから、悦んで讀んで見たが、どうもお答へするまでの事もない。松村は佛教も能く知らぬ、佛教哲學は恣んなものだと講釋した位なので、議論にはならぬ。

然り、モー女人筋には予輩の云つたやうな事は夙に解つて居る筈だから、何を今更松村が云ふのだ位に取扱はれるであらう。サアそこだ。そこがいけないと云ふのだ。ソコで我が議論を結ぶと、第一には、開んな嘘を説いて居ては今に其嘘が分る、君等の説いて起させた信仰が潰れて仕舞ふから、何にもならぬと云ふこと。第二には此んな嘘や方便を説かすと

も眞實を説いて十分に其正信を起させることが出来るでないかと云ふこと。第三は從來の祖師やお經に拘泥するから無理が出来る。人間進化の今日科學哲學の上に一步を進めて信仰に入り、其信仰を説けよと云ふこと。第四には知識と信仰とを併有して、而して自得體驗の境に入るを以て極意とする事。第五には宗教本來の目的は人心を救ひ、社會を救ひ、國家を救ふ上に在るぞと云ふこと等である。

呼諸君、今や天下の諸教は皆革命的時期に際して居る。今より十五年以前、予輩は一つ歐米を廻つて、此宗教革命の機運が怎ういふ風に向つて居るか、又諸宗教家が此の對策を如何に考へて居るかを知らんと欲し、彼の地の大學や、大教會に名を知られて居る人々に會つて質して來た。

予輩曰く、君等は宣教師を派せて基督教を傳へて呉れたが、予輩等は眞赤になつて之を信じ、一ツ身を基督教に捧げて一生懸命の仕事をして來た。然るに今日になつて見ると、其の信じた教理の大半が知識學問の爲に嘘と分つた。處女降誕も、バイブル不謬も、贖罪説も、天國地獄も信じられなくなつて馬

鹿を觀た、君等は今日怎う基督を説くつもりかと詰つたら、彼等は大意して其は君ばかりの問題でない。天下擧げての大問題だと言ひ、色々と意見を交換して來た。

然り歐米でも其幾千年教へて來た、奉じて來た、基督教に大缺陷を生じて來たので、大恐慌を來して居るのである。其教會では從前の通り、矢張り舊信仰に從つて説法して居る。然しモウ知識學問を追究する青年學生等はそれに耳を傾けぬ。故に青年學生の教會に出席して居るものは極めて少數である。而して此の青年學生が無宗教になり、從つて無道德になり、モ一歐米も羅馬の末路と同じものになりつゝある。故に彼の國有志の心配は一通りでないのである。

ソコで予輩は三四十年前より此の趨勢を看取したので色々考へて居たが、到頭二十五年以前より教會なる一の宗教團を起して其の任に當つて居るが、つまるところ、今日迄我が得たる學知と體驗とを以てするに結局は一ツとなる、分け登る麓の途は異なれど同じ高嶺の月を見る哉である。而して之は古

いゝ言葉で少しも新しい事ではない。然し其光輝はいつも新しいものだ。此月は活て居る。孔子は支那より此月を拜せよと云ひ、釋迦は印度より此月を拜せよと云ひ、耶蘇は猶太より此月を拜せよと云つた。然るに其弟子等は此月を拜せずして、孔子や釋迦や耶蘇の指を拜んで居るから、別々に分れて争ふて居るのだ。而して此説は佛教の傑物で千年以前唱へた説だ。然り東洋には古來如此いふ卓見を吐いたものが幾等もある。故に今日宗教革命の先驅者たるものは、我が東洋殊に今日では我日本であらねばならぬ。我黨は高言に似たりと雖も茲に此の卓見と體驗とを提げて彼等歐米人の目を醒してやりたいと思ふてゐる。

左るにても我諸宗教者諸君は何をして居られるのだ。宗教革命どころか内輪喧嘩ばかりをして居り、而して此腐敗墮落した政黨政治を攻撃するどころか、却つて之に追従して居る。而して國民は塗炭に苦しみ、國家は危機に瀕し、不穩の情勢は全國に漲つて居る。之を疑つと見て居れうか。予輩が狂せんばかりに暴言を吐くのも無理ではあるまい。

結 論 (増補)

今より七八年ほど以前と覺ゆ、鶴見の總持寺の伊藤道海君より頼まれて、あの百疊敷の大廣間で、世界宗教の趨勢と題して、一場の講演を試みた後で、予輩が新井石禪君に向ひ「君は此頃米國へ行て歸られたとの事であるが、彼の國の宗教の趨勢を怎う見られて來た。今日存在する既成宗教は、革命か將た改革かの二途に迫つて居る。君は何方を行つつもりか、予輩は基督教を改革するつもりで、日本教會と名乗つて出て來たが、怎うも基督教の連中がブツ／＼云つて承知しない。ソコで今度は革命と定め、其名稱を教會と改め、茲に何宗と名乗らない一個の新しい宗教團體を起すに至つた。予輩より觀ると、革命も改革も、其實を云へば同じ物だ、釋迦は當時の宗教界に革命を起して、佛教と云ふ一の新たな宗教を開創した。然し、從來の印度教を改革したと云へば云へる。耶蘇は同じく當時の宗教界に革命を起して、基督教の開祖となつた、然し猶太教を改革したと云へば云へぬこともない。何となれば兩方とも其

の根據を舊宗教に置いて居り、其の大部分はあまり買つて居ないからである。尤も釋迦も耶蘇も別に新しい宗教を起す氣でも何でもなかつた。釋迦は、唯だ涅槃解脱の法を説いたばかり、耶蘇は唯だ道と眞と生命を説いたばかりである。君は果して何方を行つつもりか」と尋ねたらまだ其處までは考へて居ないとの返事であつた。

ソコで一つ予輩の立場を云ふが、予輩が基督教を改革するとなるならば、恚う説くのである。曰く、『今日までの基督教の教理には色々の迷信や、人作や、虚偽を交へて居るので、知識學問の開け来る今日では、世間に通用しなくなつた。然し基督教としての根本教理は依然として變らない、バイブルの不謬説の如き、其督の處女降誕説の如き、贖罪説の如き、原罪より来る天國地獄の説の如きは皆否定してよろしい、信じなくてよろしい、否、信するに足らぬものとなつた、然し天地主宰の神を父とし、君として拜すること、之れに感謝し、之に祈禱を捧げること、は、今日開け来る知識學問に影響されな、即ち信神は今日の科學哲學の上に立つ正信であ

ソコで此日本教會を起して、此の新基督教を説くつもりであつたから、矢張り他の基督教と同じく説教の前に聖書を読み、讚美歌を歌ひ、其督の名によつて祈つて居た。然し段々變になつて來た。此聖書の中に誤謬がある、此讚美歌の中に我黨が信ぜぬ神學説がある。故に終には之を讀んだり歌つたりするのが厭になつて來た。又其督の贖罪を信せぬから、其督の名に依つて祈ることも亦無意味になり、間もなく皆之を廢めることになり、段々と基督教の形式より遠ざかることになつた。

其處へ以て來て、ユニテリアン協會で『自由基督教の集會』と云ふやうな名で予輩を呼びに來たから、村井君と二人で出掛けて行くと海老名禰正君や、安部磯雄君や、内ヶ崎、岩本、三並の諸君も居たやうに覺ふが、予輩が此等の諸君に向ひ、時に諸君にきくが、予輩は基督教を傳ふる積りだが其督を中心とせぬ、其督が微かつても基督教は立つと思ふが怎うぢや」と聞くに、海老名君が第一に發言して『イヤ其督の無い基督教は成立たぬ』と云ひ、岩本君を除くの外、皆之れに賛同したから『其れでは僕等

る、體驗である、之れが基督教の本尊であるから唯之を確りと把へて居れば其れでよろしいのである。次には修徳である、是れも耶蘇が力を盡して説いたものだ、神に感謝し、神に祈禱し、神に信賴するばかりでは不可ない、努力一番精神修養に盡さねばならぬ、第三には愛隣である、基督教の他教に秀で居るのは社會奉仕の事業である、唯己れ一個が天國に教はるゝことを念するばかりが基督教でない、一身より家庭、家庭より社會、社會より國家全體に神の意を奉ぜしめねばならぬ、即ち天國を此世に建設せしむるのが其主張である。第四には永生である、此の永生の信仰は各宗にもある、然し基督教ほどハツキツして居ない、此の信仰は近代開け来る心靈の研究によつて益々強固になつて來た、左れば此の綱領を信せよ、而して實行せよ、之れが純粹無難の基督教である」と。而して恚う説けば其れで改革的基督教ども、新基督教どもなつて現はれることが出来るでないか。

予輩は此の革命的基督教を説く爲めに日本教會を起したのだつた。

は此仲間でない」と云つて歸つて仕舞つた。其上爾來基督教の機關たる諸雜誌を讀むと、皆予輩等の主張を基督教でない云ふやうだから、ア、面倒臭い、其れなら基督教でなくて可いぞと定め、ソコで名を道會と改稱して今日に至り、今日では改革のつもりが革命となり、何宗にも何教にも屬せぬ、一箇の新宗教團體となつて居る譯である。

然し問題は猶殘つて居た。宗教は生れるもので、造らるべきものでない。松村が四綱領を提げて新宗教を起さんとするが、それが物にならうか、理窟は左様でも其れは生ける宗教となるか、それはなるまいとの事であつた。然るに論より證據がある。今日我道會では無宗教より入つて來るものが多いが、其れが涙を流して我神に感謝祈禱するものなつて居る。『來つて見よ』である。

左様すると『道會』は新宗教か舊宗教か、曰く、革命したと云へば新宗教となるし、改革したと云へば舊宗教となる。然らば何方か。之を主唱する汝は何と謂ふかと云へば何とも云はない。何方でも諸君の云ふやうにするがよろしい。予輩は唯予輩が多年の

間に學知した、又靈覺した、又體驗した、而して眞に今日有難いと思ふて居るものを説いて、共に與に此の信仰に入れよと人々に勸めて居るばかりである。

然し基督教から出て來たものであるから、故郷を難しで、何處までも、心の底より基督教者に忠告したいものを持つて居る。而して其れは是れである。曰くモ一今日に開け來る知識學問を無視しては基督教の擴まる氣遣ひはない嘘は永く續かぬ。加之其れは人を誤らすこととなる。何となれば其人が何時しか其の信するもの、嘘であるを目醒むる時には非常な苦悶を其人に與へ、其人をして其信仰を失はしむると同時に、動もすると、ヤケを起して竟に不信仰不道德の人ならしむる虞れがあるからである。否虞ればかりでない、現に予輩も其の危険に罹つたし、又現に基督教の先輩の其に罹つたのを見て居るからである。

故に悪いことは云はぬ、早く基督教を改革して今予輩の云つたやうに説き給へ。而して之れが本當の基督教であると云つて出て來給へ。左様すれば前に

道ふ如く、宗教としては矢張り基督教の上に出るものが無いから今日の日本は愚か、世界の基督教の改革者となり、又其先覺者となり、其れで歐米までを率ゐて行くことが出来るに相違ないと思ふからである。

諸君は何故まだ目が覺めぬか。ヨハネ傳に載つて居る耶穌の言に曰く「エルサレムにも非ず、又此山にも非ず、神は靈なれば拜するものも亦靈と誠を以て拜すべきのみ、今其時になれり」とあるでないか、此言は耶穌の云つたものではあるまい、耶穌よりもモット見識の高いもの、言であらう。然し何方でもよろしい。君等の信するバイブルに載つて居るでないか。否、予輩より謂はしむれば、Fatherhood of God, Brotherhood of man 文を説いても基督教の特別性は認めらるべきものである。又其實際に於ては「心を盡し、意を盡し力を盡して、主なる汝の神を愛せよ、是第一の誠なり、第二も之に同じ、己れの如く汝の隣を愛せよ」(馬可十二の二八)との二教でも、優に世界を潤歩する大宗教たるを得るのである。復た何ぞ末節に拘泥して自ら滅亡することを爲

すや。

佛教は二千年を経て種々に進化し、幾萬のお經となり、幾十の宗派となり、幾多の教義に分れて居る。故に之を一言で云ふのは六ヶ敷い。然し玄人筋には大抵統一したものがあつた。然らば其れは怎んなものか。曰く、佛教は智を第一となし、悟るを以て極意となす。左れば何を悟るのか。曰く、此天地万有は一物より出て居る。而して天地萬有と分れて居るのはつまり此一物の權化變化に外ならぬ。而して此天地萬有の間に因果の法ありて、之を支配して居るが、人間も亦其支配の下に在るのである。ソコで幾等方んでも人間が此法より離るゝことは出来ないから、消極より云へば、此法に服従せねばならぬと諦めること、積極より云へば、之を悟つて其法に合心し合體して行くこと是れである。

尤も其根本が汎神教である。故に天地萬有と云ひ、一物と云つたところで、自らも亦其一物の外に出でないから、つまり還元返本以て權化以前變化以前の其一物即ち絶對とも、法身とも、眞如とも、空在とも云ふ物其物に合し、無始、無終、無限、無窮、

不生不滅の理を覺知するに在る。故に本當の處から云ふと、向つて拜むものも、祈るものも、感謝するものも、何にも無いから、宗教ではなく、哲理の悟得に止まるのである。

然し其れ丈けでは何うも人間と生れて來たもの、心を満足せしむることが六ヶ敷い。否、眞に其を悟覺し來れば、其れで十分満足が出来るのであるが、其れは極めて少數の人に限り逆も一般人に六ヶ敷いから、さてこそ其の一物を諸神や諸佛に權化せしめて、之を拜ませ、之れに祈り、之れに感謝せしむるやうにしたのである。而して其れが今日普通の佛教となつて居るのである。

於此乎佛教諸君は謂はん、耶穌あがりの松村が何を知らぬか、到頭佛教で尻尾を出した。それは彼だ、これは此だと定めて、口を尖らせ給ふであらう。よろしい。一ツ其議論を聞きませう。然し斷つて置くが、各派、各經に分れた議論では不可ない。其統一した處を云つてくれ給へ。

ソコで今日の佛教を怎う説くべきかと云ふに、モ

一假神假佛を説かぬことだ。否、説いたところで其假神假佛たることが分つて仕舞へば其効能がないから、サツバリと之を廢め、阿彌陀も觀音も不動も皆之を拜まないでも可いものと大膽に之を告白し、而して上根者即ち女人筋に向つて直に眞如若しくは法身其物に合すべきを説き、下根即ち一般の素人筋に向つては眞如若しくは法身其物拜せよと説くべきである。

然し其合身を説くにしても、往時の様に隻手の聲だの趙州の無だの、開んな謎のやうな廻り遠いことを云はず、直に諸君が靈覺して居る體験して居る悟道其物を説き給へ。尤も其れは所謂る以天合天の工夫で、口以て言ふべからずである。其れを言へる丈け云ふのだ而して其を己れの行動の上に表示してやるのだ。

又一般の人には阿彌陀や觀音や不動の代りに、法身の祭壇を作つて、之れに祈念を込めさせることである。然しながら前述の如く一神教も、汎神教も、理論丈ではつまり行詰まるから、其の上に信仰を加へ、其信仰を段々進めて行くと、一神教が汎神教に

入り、汎神教が一神教にならずば、つまり十分に吾人の宗教心を満足せしむることが六ヶ敷いから、否、予輩は確に之を實驗して居る。而して恐らくは諸君も之を實驗して居られるのであらうから、神が人格であらうが無からうが、法身の正體が其物であらうが、つまり我等が人格である以上、先づ人格として之を拜し、之に祈り、之に感謝するやうにならねば本物になることが出来ない。

故に彼れ智以て一水萬波の理を悟つたり、因果の法で支配せられてゐるものと諦めたりするばかりで了るものは、眞の宗教から云ふと門外漢である。

靈的經驗から云ふと、まだ一神や法身の眞を知らぬものである。まだ玄妙の奥に到つて居らぬものであると思ふが如何

神道を如何に改革すべきか。神道は宗教か、宗教でないか。單に我皇神を始め其他國家に大關係ある諸人格を祭り之に尊崇敬拜の儀を捧ぐるに云ふ丈けなら宗教でない。然し之に祈願を籠めるものも無いではない。而して已に之に祈願を込むとなれば宗教となる。左れば何方が本當か。實の處其さへハツキ

リとして居ないほど幼稚なものである。斯くて又之れに祈願を込める宗教として之を觀ると、即ち多神教となる。而して多神教となれば宗教進化の方より觀ると是れ亦幼稚時代のものである。尤も、一つを得れば二つなし、有るかと思へば形なし、無きかと思へば御靈あり、之を大元の神と申奉るとあるから、つまりは法身より出て來た假神假佛と同じく一神教に歸する。

ソコで予輩の提唱する改革案と云ふのは、丁度佛敎者諸君に申したと同じ事で、モ一今日は此んな幼稚な多神教の形や宗儀を取らずズツト廻つて天の御中主の神に至り之を其本尊として祭り、之に感謝し、之に祈禱を捧ぐるやうになしては如何。

尤も法身と云ひ、此の天ツ神と云ひ、元來形の無きものであるから、之を拜め、之れに感謝祈禱せよと云つたところで標象が無いから凡俗は困る。凡俗が困るから、此迄は止むなく方便を用ひ、猶太教は祭壇を造り、基督教はマリヤや使徒の畫や像を造り、佛敎は假神假佛を拵へ、神道は多神教を其儘利用したのであるが、モ一今日は其時でない。神は靈

なれば拜するものは皆靈と誠を以て拜すべしと説くべきである。否、左様しなければ今日のやうに進んだ學理に融みたる宗教となることが出来ないと思ふ。諸君以て如何となす。

結論の大尾

此處まで書いて來たが、讀賣の方より後がつかへて居るから早く締めてくれとの事だから是れで大尾とする。

尙ほ「如何に儒敎を改革すべきか」や「外道や低級宗教者を如何に指導すべきか」や「諸教の極意の『玄之又玄衆妙の門』や『宗教は六十歳からだ』や其の他建設的積極的に書きたいことが澤山ある。

加之大乘から云ふと、今日の日本を此儘袖手傍觀して居るのは眞の宗教家の態度でない。故に積極的に寺院や神社や教會を利用して大活動を開始すべき具體案をも云ひたいし、更に今日宗教學校は皆駄目だ。あれでは往時のやうな豪い僧侶や宗教師が出て來ない。故に是非とも之を改造しなければならぬ。而して其れに就ての具體案もある。然し先づ此度は

之れ丈けにして置く。

さるにても讀賣新聞宗教部の大量宏度に感服した。今に止めて呉れとの御通知があらうと思ひつゝ、毎日／＼原稿を書いて来たところが、到頭こゝまで書かせて下された。こんな亂暴の事を遠慮なく書いたのを載せて下されたに就ては随分方々に支障を生じて、色々御迷惑をかけたことでもあらうから、只々感謝の外はない。

又駁撃文は此方より望んで居るところだが、之を一々讀賣新聞に出せば予輩の答辯をも出さねばならぬことゝなるから逆も出来まい。されば諸宗には夫々機關がある。其れでドシ／＼やつ／＼けてくれ給へ。予輩も『道』と云ふ機關があるから其れでお答へをする。左様ならば、之れにてお暇とし、謹んで讀者諸君の御辛抱を謝す。(完了)

x
x
x
x
x

松村氏に呈す 力彌生

讀賣新聞に出てる時に流石に松村氏だ、よう云はれたと敬意を表してゐた。今回「統一」紙上ではこれに對する意見を認められてゐるから道の爲めに簡単に更に批判を許されたい。さて「グヂヤ」した問題は按として、足下の信託に於ける神觀が甚だ不透明に見ゆる、一神、汎神、不可思議の三種の神觀は皆行話つて漸く信仰の心より抽象的な神、想像神を認識するにあるやうだが、先頃もストライク一教授が人格的神觀は吾人の體驗せる形でよいやうな意見で足下と同一意見に出づるものと認めらるゝが、然らば其神の人格實在といつても各人各様で不統一至極の端の頭式になる。それならば足下の主張さるゝ信仰が裏切られて知識を無視した科學哲學の上には成立せぬ低級迷信となり下がる、信仰と道徳とが分離するの此の神觀即ち本尊觀の不徹底から出發するものであるまいか。足下の神觀が單に神から父に下つて師の徳なきが故に修徳を陽明にからればならぬ事となるのであるまいか。

足下は佛敎の刷新意見を新井師に訊ねられたそらだが、それは大きな見當違であつた、彼は佛敎の道義觀も政治論も知らぬぢやないか。大きな寺にあるから必ずしも博學であるとは申されない。現在では坊主らしい坊主はゐない、尤も天下唯一人ないでもない。足下が眞に敎を求むる熱心な眞劍味ならばお告げせぬでもない、道のためにどうかしらありたいと思ふ。

足下よ、主師觀三徳完備の人格神を知らぬ事は宗教家として人に信仰を云々する丈の資格はなからうぢやないか、修徳は愛憐だ永生だと云つても其肝心の中心たるべき神觀に誤見あれば他は問題にならぬではないか。
足下のやうな大人が自己推定でこの大きな事柄を測斷することは甚だ遺憾に思ふ、宜し今一段と研鑽を積んで頂きたい。

松村氏に對す

(質第一信)

林 隆 正

貴公も佛子、我輩も佛子である、お相手に不足は云へまい。さて貴公は一切經を通讀されたか、法華經を何と見られた、善量品を讀まれても眞意を林得出来なかつたと思ふ、釋尊が單に皇子として出現されたとは見て久遠の釋尊を知らぬこれが貴公をして遠説を唱ふる所以である、釋尊が自ら久遠劫來實在常住なるを説かれたのが法華經善量品である、貴公は歴史上の釋尊を知るも宗教上の釋尊を知らぬ事は氣の毒に思ふ。貴公は法華經は釋尊が説たものでない五六百年後に出来たものだと云ふが、その確證はあるか、一番歴史的に説明して貰ひたい、(は一)我輩は法華經の出現が佛滅後數百年といふ事を否認するのではない、それは經本として出たのはそのうだろが其思想はあつた、唯かに法華經は直接釋尊の御口から説かれたといふ事は事實が證明してゐる、これ程確かなものはあるまい、貴公程の物語りが釋尊當時に人々が口から口へと傳へた印度の歴史を知らぬの答はあるまい、そして當時の學者國王宰官乃至宗教家殆んど皆釋尊の御弟子になつてゐるが貴公は「釋尊は我輩等より無智無學の徒である」といふ、然らば信用するが「妙法蓮華經」と題して簡潔明瞭に一番説敎を願はう(是二)それが満足に解答出来ぬやうでは到底佛敎を論ずる資格はない、諸敎批判は但し佛敎を除くとしてどうか、貴公がもう少し若ければ佛敎の研究をも勤めるが、善古稀と聞いでは其縁もないかと思ふと前途寒心の至り、せめて我輩の至誠貴公の爲めに本佛釋尊に懺悔滅罪を願ふ、以上の二問を質すために一矢を放つ所以である。

『諸敎の批判』の批判に答ふ

松村介石

『統一』誌に出た本多日生氏に答ふ

本多君能く出て来て呉れた。怎も今日の様に、諸宗教の眠つて居るのは、如何にも心外であるから、老を忘れて出て来て、一各各方面に目を醒させたいと思ふて、随分思切つた事を言つて見たが、質問とか辯駁とか言つて出て来る者が、殆んど無數と云つてもよい。讀賣新聞社に来て居るもの丈けでも數十通ある、又予輩のところへ来て居るものでも、なか／＼ある。しかし皆君の門下生のやうなもの若くは女人より聞き噲つた上に、自ら少し御經を讀んだ位の素人なので、怎も本氣になつて相撲を取る氣になれないのだ。ところが君が堂々と出て来て呉れた。君と予輩との個人關係は別として、一つ御互に研究もし、辯難もし、又一しよになつて、世の宗教家を搖り動かして、我精神界に一片の火を投じやうではないか

ソコで少しく君の所説に就いて、異見を加へて見よう。

第一、予輩は法華經の内容や實質如何を云ふのではない。此迄釋迦の直説を直ぐに書いて傳へて居たのだと説いたのを、モ一今日は赤裸々に之を釋迦滅後五六百年後に出来たものと言つたら怎だと云ふのである。君は抹殺博士や、大乘非佛説などを持つて來て、色々云ふが、論ずるところ矢張り、釋迦の直説でなくとも、兎も角釋迦の心の中にあつたものだと云ふのか、其れなら其れで可いが、其を明白に言つて貰ひたいのだ。

二

色々の御經を持出して、佛法の有難いこと、又た其の眞理であることを説くが、それは有難いことも眞理であることも随分あらふ。しかし何千巻と云ふ多くの御經を、皆悉く眞理だ、有難いと説くのは無理でないか。つまり予輩の議論は、バイブルでも、御經でも、人の書いたものだ。當時の知識の書いたものだ。當時の體驗者の書いたものだ、而して其の

三

ソコで君は釋迦を完全無缺のもの、様に説くが、其は無理であるぞ、丁度今まで耶蘇を神の生み給へる獨り子で、神其のものであると説いたのと同じことで、こいつはもう通らんぞ、そう言ふ風に説くから、今日の學問知識ある者が、馬鹿々々しくて嗤ふ

て仕舞ふと言ふのである。

四

要するところ、佛法には佛法の眼目が有る、哲理がある、主張がある。其の眼目哲理主張は、釋迦の發見したものにしても、其發見すべき眞理は、實物が無始無終に存在して居るからである、そして其の眞理實在を認むるものは、唯り釋迦に限つたものではない。我にも釋迦を借らずして發明發見すべき筈だ、否、今日の様な學問知識の開けたる世に生れたものは、釋迦よりヨリ明白に、ヨリ確實に其の物を認むべき筈であると説くのである。つまり釋迦や耶蘇や孔子に隸屬するな、眞理實物に向ふて直進しろ、そして釋迦や耶蘇や孔子以上に成れよと、言ふのが予輩の結論である。尤も之を凡俗に強ゆることは出来ない。しかしお互に此の有難い世に生れてゐる以上、釋迦や耶蘇や孔子に負けまいと奮發しやうではないか。否、釋迦や耶蘇や孔子の言つたことを取り次いで、それ以上に出ねばならぬでないか、否、いつまでも釋迦や、耶蘇や、孔子や、その説いたバイブル

や、御經や、經書に喰つついて居るやうなことでは到底今日のやうな宗教革命時代に、應ずる事が出来ないと言ふのである。

五

尤も今度君の所説に感じた事が幾らもある。君は法華經を外部より見たら不可ない、之を錦の袋に入れて有難く思へよと言つて廻つたところで、何にもならぬと言ふ、之は有難い御説法である。又た南無妙法蓮華經と言つて、大きな聲で吐鳴れば、吐鳴るほど、大鼓を叩けば叩くほど御利益がある、有難味が増すと思ふもの、如きは、本當の法華經信者でないと言ふ、之も有難い。又た御地藏様や、御樂師様のやうなものは、論ずる價值もないと言ふ、之も有難い。畢竟するところ、法華經の説くところを身に實行するに於て、始めて其の有難味も價值も出ると言ふ御論は、立派なものだ。予輩の云ふのは其處だ。しかし今日までの説き方を聞くに、大きな聲で南無妙法蓮華經と吐鳴り、ドン／＼太鼓を叩き、日蓮聖人を拜んでさへ居れば、病氣も癒る、商賣も繁昌す

る、災難も免れると言ふ様であるから困るのだ。今日でも其信者の方が多いであらうから、怎も猶ほ其人々を警めて呉れ給へ、否、そういう事を言つたり説いたりする信者が多い間は、今日の開け来る世には、つまり低い宗教として尊ばれず、御利益教として馬鹿にされるから、耶蘇教でも、佛法でも、此處に氣を付けねばならぬと言ふのが、否、氣を付けねば、だん／＼衰へるぞと言ふのが、予輩の論據である。つまり佛法と言ひ、法華經と言ひ、それが悪いと言ふのではない、從來の説き方を變へよと言ふのである。即ち之れ迄素人玄人の區別を立て、説いて居たのを、モ一素人の方は止めて、玄人の方許りにしたら怎だと言ふのである。

六

君の信仰の根據と題して書いた議論は、多岐に亘つて居る、そして三十六頁にもなつて居るのだから、一一批評しないが、つまり予輩に關する丈の要點は先づ斯んなものであると思ふが、なほ引き続き論じて見やうぢやないか。

○知法思國會街頭布教大運動記(其一)

序 言

愈々政府も教化問題の重大なる事を自覺したらしい、我が知法思國會年來の願望であるが故に此の機会を善用して豫ぬての教義を擴張すべく本會の幹部總動員のもとに不取敢十月一ヶ月間に亘り屋外教化運動を行ふ事となつて理事會の決議を経た、名士と無名士を問はず全く老若を擧げての大運動である、本部の事務所は九月の十日頃から其の準備に渡部滿事、梶木顯正、山口智光、伊東竹三郎、眞義章の六氏が目の廻る様うな忙しさを、東京市内外を通じて次の如く廿一ヶ所(明治神宮參道入口、上野公園、本郷區新花公園、京橋南横町大通日本橋濱町公園、半込神樂坂毘沙門内、千葉縣市川町、府下小松川、深川公園、大崎町居木橋交番横、府下笹塚公會堂、府下狹橋專賣局前、神田區専修大學校庭、本所區錦糸公園、川崎市、府下大森山谷、府下品川町南馬場本光寺前、江戸川橋詰、府下瀧の川、淺草區三味線場、淺草區新谷町壽仙院前等)を厳選し一方警視廳及び市の公園課を訪問し運動に就ての大體の了解を得萬事手落ちなきやう其の陣容を整へ九月廿九日(第五日曜)午後一時より統一閣に各方面の打合せ會を開いた。責任ある人々七十餘名の來會を得て諸般の打合せを済せ愈々十月一日を期して本運動の火蓋を切る事となつた。

誌上賀詞交換御案内

年始にはお互に賀詞を交へ度く連載御希望の方は来る十五日迄に御住所肩書氏名等御明記の上統一編輯局宛に御申込み下さい。

掲載方當方に御一任の場合は無料

持に御注文記事ある時は五號活字一行十五字

詰十錢の割を以て前金お添へ下さい。

施本用として臨時増冊は同時に御申添願ひます。

●第一日

待ちに待つた十月一日は來た、早くも一日の午後三時本部では諸般の準備を了り山口智光、眞義章、梶木顯正の三氏は自働車二臺に一切の宣傳用具を積込んで豫ての豫定通りの集合所(赤坂區青山南町五丁目安川繁種氏宅)に出發、それより手配一切を終つて一同の參集を待つ間程なく同志の人々は續々／＼とつめかける、天候は申分なく、時刻はよしと七時十分前安川邸を陣、本日の陣容は「知法思國」立正安國を記入した高張二本を先頭に本多親下揮毫の八尺の大玄題旗二流白地に黒文字の堂々たるを打立て「知法思國」廣宣流布」と染抜いた赤と紫の警句旗六本を押し立て二列縦隊と成つて講演會場に行進、列の中央には同志の中村清一氏と蘆田太吉氏の二人が大太鼓を荷ひ和賀義見師が之れを打つて玄題の行進曲に各々メカホン隊警戒用手提提灯等大示威行列を爲しつゝ目的地へ向つた。安田銀行前に至るや眞義章氏陣頭に立つて知法思國の歌(小林小郎氏作)を高唱一同之れに和し終つて山口智光氏開會を宣し續いて働く會々長峰田一步氏一働け報ひられん」と説き次に小野泰道氏、次に鈴木秀學氏續いて市會議員島本龍太郎氏次に本多日生親下、現下の國狀を招來した所以は宗教信仰を侮蔑した結果に依ると斷じ之れが救済の道は國民精神の根底に宗教心の喚發を促さなければ到底他に術なき事を高調され次に梶木顯正氏飛び出し次に井上陸軍中將

「明治大帝の遺業を憶想して」と題して現下の國狀はあらゆる方面から我が國民の奮起を促してやまぬ事を力説、次に和賀義見氏日蓮聖人の主張に基いて宣敷我が國民は東洋文化の完成に起つべし、と結び豫定の九時と成つた爲に再び梶木顯正氏起つて本運動の日割表を朗讀し明晩も同じく當所に本講演會を開催する旨を豫告し來聴者と共に深く井上一次閣下、大僧正本多日生親下の御奮闘を感謝しつゝ閉會を宣し一同知法

思國の歌を高唱して散會、一方別の一隊は淨土宗善光寺前で開會した、開會の辭梶木顯正氏次で峰田一步氏同杉内芳太郎氏次で箕義章氏等交々起つて國民總動員の叫びを上げ最後に山口智光氏閉會を宣して同く九時を合圖に兩隊相ひ合し堂々列を爲して途中示威行進を以つて安川邸へ引き上げ直ちに諸道具を取りかたづけて各々明晩を約し感激にみちつゝ散會した時正に十時廿分前聽衆約三百名。因に當夜の應援者は磯部滿事氏、福井治昌氏、羽入田真人氏、岸野藤右衛門氏、山田英二氏、鈴木信愛氏、吉田芳子氏、中田こと子氏、吉田孟子氏、後藤伸子氏、西山吉五郎氏、高見澤藤氏、池田松一郎氏、清水万藏氏、山口梅子氏、福島健次郎氏、寺田規一氏、蘆田太吉氏、菊地三郎氏、和田皆吉氏、長谷川福太郎氏、近藤二郎氏、外五人、相馬和雄同千代氏、岩野直英閣下、伊東竹三郎氏、本田健二氏、高橋辰二氏、川西金市氏、川原謙子氏、小野銳子氏、吉田芳緒氏、若林よね子氏、外地明會の方々其の

他多數名前を記しきれなかつた程で少なくとも同志會員の方々を合して百名は居られたことを感謝する。

● 第二日

十月二日場所は前夜と同じ明治神宮参道入口安田銀行青山支店前、午後の五時本部事務所から梶木顯正、富田顯道、高木鑑三郎の三氏出發安川邸に至れば早や會員の村田富次郎氏が同邸入口に「知法思國會屋外教化大運動」と大書した大旗を靡かせて頭張つて居られた、其の内に本田健二君、福島健次郎氏、中田こと子氏、磯部滿事氏、山口智光氏等續々詰めかけて來られ忽ち準備は出來た、一同邸内で勢揃をする同會者梶木顯正師は今晚のプログラムを披露し終つて知法思國の歌を太鼓と共に合唱「出發」の聲もろ共に門外へ繰り出せば先頭に「知法思國會屋外教化大運動」の大旗を押し立て、例の如く要所々にメガホンを吹きながら徐々として目的の場所へ太鼓の音勇ましく行進、先發隊が安田銀行に至れば早や本多親下は來て居られた。一同到着と共に直ちに會歌を合唱終つて支題十返次で梶木顯正氏立つて開會を宣し續いて宗學林生玉島英龍君大いに思想問題を論じ次で學生木村智弘君信仰談を高調し終つて富山縣本報寺住職關厚勇師日蓮聖人鎌倉當年の國狀を論じて現時國民の國體觀念に對する是正を熱叫し會員の北條平太郎氏後を受けて日蓮主義の熱と信仰を顯揚續いて宗

學林生遠藤實照君時局問題を論談次に箕義章氏立つてマルキシズム批判に論歩を進めロシヤはマルタスの理想を實行して豫想外の大失敗を招き國民をして塗炭の苦しみに突き落したとスツバ抜きレーニン一派をして其の顔色を無からしめ次で本多大僧正登壇人間の重大なる心得に就て説き去り説き來つて約廿分間信は道の源功徳の母なり菩薩の願行に立つて法悦歡喜の生活に入るこそ最も頼もしき最も有意義なる人生なりと結論せられ被いて小西日喜師「喜び得る者は幸なり」と説いて人生問題に對する諸種の信仰的批判を加へ絶對感謝を捧げ得る者こそ眞の幸福を得た人なり、と氏獨特の熱辯を振ひ終つて時九時十分過ぎ、一方應援隊は梶木氏の開會の辭が終ると二隊に別れ一隊は會場の警備と整理に残り一隊は梶木氏引卒のもとに先づ福島健次郎氏寺澤信平氏の荷へる大太鼓を中心として玄題旗警備隊を先頭にメガホンを吹きつゝ講演會場を中心として周圍の町々を狩り出しに出發八時半會場に歸着各其の部所についた。小西師の講演が終るや磯部滿事氏壇に登り閉會の辭と共に本運動の日割表を讀み上げ最後に梶木顯正氏發聲のもとに 天皇陛下の萬歳三唱了つて一同會歌を合唱隊伍堂堂會場を後に玄題を口唱しながら安川邸へと引き上げた。前夜と同じく天候は好し全く佛天の御加護と云ふか二日間に亘る本會青山方面の教戦は見事にその任を果し得た。聽衆二百餘名。それにしても安田銀行の宿直の方々が二

日間に亘つて何かと心持ちよく便宜を與へて下さつた事が有り難かつた。又地明會の故小原少將夫人、宮岡中將夫人、川原中將夫人、小野銳子夫人、其他多數の方々が他の男子側會員團員の方々と共に熱心にビラ撒き其の他を御手傳ひ下さつた事は深く感謝しなければならぬ、一同再び明日を約して安川邸を散會したのは丁度九時四十五分であつた、因に本日來授者は大體次の人々である。秋山乾英氏、長山慶應氏、高橋辰二氏、山田英二氏、吉田孟子氏、山田芳太郎氏、三上正夫氏、清水萬藏氏、鈴木信愛氏、藤江甫氏、本田健二氏、田口公信氏、近藤二郎氏、高見澤藤及博の兩氏、難波芳雄氏、山本張藏氏、宗學林生米倉君、高橋君、戸田君、坪井君、從野君、同木村君、同大泉事龍君、同教授笠原信良氏、一本木悦太郎氏、若尙三氏、山田正司氏、中本峰太郎氏、川口乙四郎氏、佐藤梅太郎氏、木下耕一氏、石川隆一氏、大谷權次郎氏、五島一雄君、山口隆之助氏、鈴木秀學氏、岸野藤右衛門氏、村田富次郎氏、川奈鏡作氏、地明會員吉田芳緒子、遠山ちか子、中田とき子、松本操子、菊地きよ子、吉田芳子、川西金市氏、青柳村吉氏、等等。

● 第三日

十月三日、場所上野公園忍阪上、開會時間午後二時の豫定、處が朝の九時半頃から空模様が少々險惡に成つて來たので本

部では絶へず空とニラメツコ「やるともやらぬ」とも判断がつかない、其の内にボツリ／＼と降つて来た十時半を過ぐるに従つて小雨がだん／＼強くなる「残念ながら今日は休會」を發表、すると又しても十二時半頃から空の様相が變つて来て何うやら一時近くには天氣に成りさうだ、本部員は氣が氣でない其の内に雨は全く止んで曇天ではあるが天氣は夕方まで持ちさうな氣配、休會を發表はしたものの何んとしても残念で堪まらぬ、すると其處へ一本木悦太郎氏が來られる川奈鏡作氏が來られる、天氣は何うでせう！と居合はせた二三氏一口同音、この調子なら大丈夫でせう！、では吾れ／＼でやりませうと相談一決直ちに同志の狩り出しに八方へ電話を掛け早やくも準備にかゝれば三人五人と四方から馳せ参じて忽ち十四五名突然ではあつたが講師側も三四名出來た時計は早や三時廿分前では出發しやう」と本部を後に古澤病院の横手を左りに折れて一路善隆寺前通りを上野公園へと本會の大運動旗を先頭に太鼓の音勇ましく進軍する途中メカホン隊の宣傳よろしくあつて會場に着くや榎木顯正氏壇に立つて本運動の趣旨を述べ開會を宣すれば一本木悦太郎氏代つて大いに國體感念に對する國民の誤謬を正し續いて田中道爾氏經濟國難の真相を説いて金解禁の可否を論じ次に猪又金太郎氏國民精神の緊張を力説され次で和賀義見氏人生と信仰と國民精神の關係を説きし信仰は人生生活の基調なる事を高調す續いて破

部滿事氏故國を離れて初めて故國の貴さを知ると冒頭し諸外國の風俗習慣を述べて我が民俗の其れに比較し我が國家の優秀なる所以を叫び終つて山口智光氏閉會の辭に兼ねて日蓮聖人の主張と現内閣の今回の教化總動員の國策は一致して居る事を説き國家の難極を打開するはかゝつて國民の自覺と否なとにあると結び次で田中道爾氏發聲 天皇陛下の萬歳を三唱して會を閉じた時に五時半、本日の應援者左の如し、川奈鏡作氏、本田健二氏、富田顯道氏、伊東竹三郎氏、報恩閣の木下耕一君、山口隆之助君、五島一雄君、村田富次郎氏夫妻其他二三の方々、地明會の安江ひさ子氏、伊藤わか子氏、岡野あきの氏、島本あさ子氏、和田たか子氏、長谷川ふじ子の諸氏報恩閣會員、野間儀十郎氏夫人、佐藤仲次郎氏、平井夫人大須賀たき子氏、藤田夫人、高見澤夫人及巖氏等。

● 第四日

昨夜よりの雨降り止まず残念乍ら休會。

● 第五日 本郷新花園

昨日に引換えて暖かな上天氣、春木町伊東竹三郎氏宅に勢揃ひしていざ出陣といふ間際には一天黒くかき曇り大雨正に來るかと思はれたが、驟々と轟く太鼓の音に又も美しい星空と變つた。時來れり、高橋辰次氏の先導に一同は隊伍堂々街路を練つて新花園公園に向ふ。夜の公園に人など集るもの

かと言はれたのに、太鼓の響とメガホンの宣傳、同志の熱誠は廣場も埋むるばかりの聴衆を集めた。定刻七時、知法思國の歌合唱、題目三唱、山口智光氏起つて、知法思國の精神を高唱して開會を宣す。次で統合宗學林學生高吉千春君、大泉事龍君の熱辯あり、二川町の加藤順順氏は會津白虎隊の遺跡に至りて感ありとて、ムツソリニーを説きて國民精神の剛健を叫ぶ。總引弘氏、榎木顯正氏に次で本多大僧正登壇、立正安國論語唱の御聲は期々として四周に響き渡る、現代文明の缺陷を指摘し、更に人は理想に生きざるべからず、然らば貪しき生活にも光あり、緊縮何かあらんと諸議を交へての大師子吼に聴衆は熱狂して、「本多日生うまいぞ」と叫ぶあり、更に國民精神の奮起をうながし、三教の融合を説き法華經の大理想を宣説して正に一時間、大拍手の中に降壇、次で中村藤吉氏の熱辯あり、學林生從野澄勇君に續いて、田口公信氏は、日本國本來の文化に立戻れと叫び、榎木顯正氏の閉會の辭あり、寺澤萬三氏の發聲に萬歳を三唱して會を終る。かくて知法思國の歌を合唱し、旗鼓堂々伊東氏邸へ引上げ、甘酒茶菓の饗應をうけ一同歡喜勇躍しつゝ家路をたどる、此の日の伊東氏高橋氏始め本郷正道會員の一方ならぬ、御盡力且つ此の日の運動廣告のため特別にピラ三千枚を印刷配布せられた事を共に感謝する。

● 第六日

天晴れて秋高し本會の運動も日を重ねて漸く熱を加へ平素の信仰を鍛練するには願ふでもない好機會である、日本橋區通三丁目電車通角を講演の場所に當て、午後六時半岡崎町の菊地三郎氏宅に集合例により本會の大運動旗を先頭に玄題旗警衛旗太鼓と云ふ順序で整列七時廿分前榎木顯正氏本日のプログラムを讀み上げやがて「出發」の聲と共に太鼓の音に和して支題の聲勇しく目的の方向に行進途中要所／＼にメカホン隊の宣傳よろしく會場に至れば忽ち百名近くの民衆は吾等を取りまく時七時十分直ちに榎木顯正氏教化運動員に對する吾等の立場を論じ「人教へされば禽獸に同じ」と開會を宣すれば代つて宗學林生林君立ち次で同高吉君次に峰田一步氏伊東竹三郎氏讀いて田中道爾氏（吾等の陣取つた向側の高樓で盛んにジャズとダンスをやつて居るを指し）若き男女が斯の如く十二時一時迄踊り狂うて居る様は正に亡國の前兆である、とて慨世の大獅子吼を爲し次に學生吉田君續いて箕義章氏、市會議員島本龍太郎氏次で山口智光氏の閉會之辭に同九時十五分終りを告げ峰田一步氏の發聲に 天皇陛下萬歳を三唱知法思國歌に氣勢を揚げて再び堂々と菊地家へ引揚げたのは九時四十分であつた。尙本日の應援者は宗學林生八名坂場愛民氏、片岡勝次郎氏、蓋田太吉氏、本田健二氏、三島燕氏下妻有隣氏夫人、一本木悦太郎氏、川口乙四郎氏、近藤二郎

氏、中本峰太郎氏、北條平太郎氏、杉内芳太郎氏、菊地雄三氏、總引弘氏、菊地勝三郎氏夫人及店員の方々五名地明會の齊藤リイ氏報恩園の耕一君に隆之助君、五島一雄君、高見澤氏夫人及藤氏、博君兄弟大須賀國三郎氏夫人井上道太郎氏、難波芳雄氏等冊餘名日本の聴衆者百八十餘名、因みに本夕は横濱清舟町三吉小學校に於て知法思國會教化大講演會開催の爲め本多親下井上一次閣下磯部滿事氏は其の方へ出演された。

●第七日

佛陀を背負ふて街頭へ！、熱烈なる祖國愛に燃えて續々と當夜の集會所京橋菊地家へ馳せ参する者正に四十人。

梶木顯正師の當夜のプログラムの報告と共に玄旗、知法思國旗を先頭に御題目の行進曲力強く日本橋通三丁目の街頭道場目指して出發したのは正に七時十分前であつた。

三丁目に達するや朋々たる大太鼓の伴奏に知法思國歌合唱、終つて算義章氏司會のもとに磯部滿事氏壇上に立つて一昨日御書誦唱し、熱烈なる口調に知法思國の意義と運動をのべて開會を宣するや聴衆は壇を取り巻きて二百名。代つて山田義一氏「六十億の國債を如何せん」と全日本國民の自覺を促し、春日井欽吾氏の熱辯に次いで頭山滿翁をして「一異彩を放てり」と評せしめし働く會々長峰田一步氏詰襟にて登壇「親切に働く者幸福なり」と體驗を通して市民の良心に訴へ、

岩野海軍少將立つて、現下難局を打開する日本國民の覺悟を述べ、次いで本多日生親下登壇、本運動の眼目たる立正安國論誦唱後一國民一同に自覺して國難を打開するものこれ教化總動員なり、之を知らざるものを「アンボンタンと云ふ」と斷じて一句は一句より熱を加へ、浮華放縱の世相を慨し、共產黨一派の賣國的行動を排撃し、知法思國の大義を提唱して降壇するやしばらくは拍手鳴りも止まず。次に山口智光師立つて本運動の意義と今後のプログラムをのべ、最後に岩野少將の發聲にて聖壽萬歳を三唱、終つて例の如く會歌合唱、題目三唱。一同隊伍を調へて題目高唱裡に菊地家へ向つて行進、一點の雲無き秋の夜の空には聖戰を祝福するかの如く星擦然と光り、靜かなる夜氣に響く題目の太鼓の音は力強く路上の人々の胸を打つた。因に本日の應援者は。

波邊清吉氏、宇野博順氏、三島憲氏、石川隆一氏、算銀二郎氏、高見澤藤氏及博氏、金指龜吉氏、土屋貞太郎氏、岸野藤右衛門氏、中山昌治氏、大原重雄氏、日蓮教壇の二三氏伊東竹三郎氏の店の人三人宮下きく氏、若林よね氏、吉田珍雄氏夫妻、菊地勝三郎氏夫人及店員の方々四五名等々、尙六七の兩夜に亘る菊地家の一家を擧げての心持ち好き歡待振りには實に御禮の申し様うもない位有り難かつた。

●第八日 降雨の爲休會

●第九日

朝から天候はかなり氣づかはれたが不精無精ながら漸やく雨だけは逃れる事が出来た。前夜の休會で今日こそは！と考へ殊に遠く横濱から多數の應援者が來て呉れた、集會場の下田家へは梶木、山口、富田、松岡の四氏が午後の四時頃から出掛けて當夜のボスターを會場の濱町公園を中心に貼り歩いた。其の内に宣傳用の荷物が前夜の菊地家から送り届けられる忽ちの内に其の夜の滿備が出来て應援者の來るのを待つてゐると報恩園の耕一君、隆之助君がヤツテ來る本田健二君が來る高見澤氏が來る岸野藤右衛門氏が來る、でば出かけ様うと早くも宣傳隊は出發、町の人々が異様の眼を以て見てゐる中を堂々と行進、大太鼓の音は町から町へ辻から辻へと秋の夜の空に高く響く、やがて七時會場濱町公園の廣場に至れば聴衆は續々とつめかけてゐる、磯部滿事氏の開會之辭に當方の幕は切つて落された。山田義一氏日本現在の經濟難極を説き中村清一氏、一本木悦太郎氏、土橋觀英氏、小西日喜氏次で本多日生親下と當日のプログラムはガむにつれて聴衆は數を増し數百を下らず、親下の方は更に加はり聞く者の肺肝を突いて一同時の移るを知らず、時に九時廿分過ぎ續いて梶木顯正氏閉會の辭を述べ次で磯部滿事氏聖壽萬歳を發聲終つて聴衆一同にパンフレットを頒布し會を閉す、尙當夜は別動隊として山口智光氏、山田義一氏、梶木顯正氏、加藤重太郎氏

●第十日 降雨の爲休會

(以下次號)

我深敬汝等、不敢輕慢、所以者何、汝等皆行菩薩道、當得作佛
法華經不輕品

記事

法法思國會第八回懇談會

本會の懇談會が十一月十六日午後五時半より麹町區有樂町日本俱樂部に開催された。講師は慶大教授文學博士川合貞一氏で「マルキシズム批判」と題して約二時間に亘り講述された。當日の出席者は左記の三十五名(イロハ順)。

井上 清純氏 岩野 直英氏 磯部 滿孝氏
石川 隆一氏 赤賀 調兼氏 岩上浦三郎氏
今村 藤一氏 一本木悦太郎氏 北條平太郎氏
本多 日生氏 荻野 慶三氏 大谷權次郎氏
織原 克己氏 和賀 義見氏 川奈 銚作氏
梶木 顯正氏 横山 正三氏 田中 道爾氏
高木錦三郎氏 田口 公信氏 永井 省三氏
野澤 一郎氏 山口 智光氏 山田 英二氏
小西 日野氏 寺澤 萬三氏 佐藤鐵太郎氏
岸野藤右衛門氏 菊地博愛氏 四王天廷孝氏
釋 眞誓氏 柴田 一龍氏 妹尾義郎氏代
鈴木 日雄氏 鈴木 秀學氏

定刻岩野直英氏開會の挨拶に續いて柴田一龍氏は川合博士を紹介され、やがて博士は主として哲學上からの見地での批判された。其速記録はいづれ「教」の誌上に譯出さるゝであらうが大略その一二を記せば、マルクスの出

たのは時代の背景が然らしめたもので當時英國に於ては資本家の狂暴其極に達し労働者の日常は實に悲慘見るに忍びぬものがあつたから、之を基礎としてマルキシズムが立てられたのは寧ろ自然の要求であらう即ち英國の經濟状態を論理的に徹底的に展開した思想と思れる。従來の社會主義者は空想的であるに對してマルキシズムは科學的社會主義と云ふ有産者に對し無産者が力によつて對抗すべく起つたのは見てこれ迄の歴史は階級闘争の歴史であるとした。歴史は悉く物質で定まるとするが其唯物史観は誤りであることは今日では明白となつてゐる。又マルクスが物と物との交換さるゝ標準をば労働にありししたのも獨斷であつた。労働力で品物の價値は事實上定まるべきではない、我等が品物を買ふにして労働を買ふ譯ではない。マルクスの學説は其根本に於て大謬見がありそして共產社會出現の境にはどうかといふことは明瞭にして居らぬが要するに私有財産制なく、社會は強制を有せず自由でありそこは國家はないが官吏はあつても支配組織なく自立社會の状態となり得てあらうとしてゐるが夫は單なる夢想に過ぎないものである。勿論彼の個々の理論に於ては決して輕視は出来ないが全体の構成上からすれば大問題であるといへる等云々。

此の有益な講演は吾等にある強い確信を與へられた。司會者岩野氏から答辭があつて食事に移つた。

食後の懇談に於ては、マルクス主義が經濟史觀によつて起り又經濟史觀に依つて倒される事は社會は闘争あるべきであらう。又利益價値に對して手と松茸の例話等今晚の講演を中心にした質議應答もあれば本多現下、四王天中將や佐藤閣下等各位の胸襟を開いた懇談感想等頻發したが其中に深く英國後世の志氣は溢つてゐた。時間が許さぬ爲めお互に感謝し、つ散會したのは十時であつた。

大慈院開堂式

所 京都總本山妙滿寺塔中
時 昭和四年十月十三日
千歳一週とも云ふべき開堂入佛式の招待を受けた余は、喜んで参列するの光榮に浴した然も十月十三日は宗祖上人御入滅の聖日である、十二日午前迄降り續いた雨も十三日には名残なく晴れ、秋の氣を一入深くし、何となくすがすがしく所謂開堂式日和とも云ふべき聖日であつた。

大慈院の改築は大正十一年より計畫し昨年八月工を起し、本年五月完成した、面目全く一新し本堂と庫裡とを別棟にした所に從來の院廊とは異つた所がある、大導師岡崎本山部長を始め隨喜参列の僧員廿餘名、院廊としては近年になき音楽大法要であつた。

土持住職の報告文に繼いで大導師川崎部長の慰讃文續いて金光管事の教區代表、顯本健兒

會代表、及び宗務總長より中川宗務總長の祝電、大森財務部長の祝詞等、全国より集まる祝電數十通の披露があり、中にも大慈院先生としての因縁からさるゝ、山根日東上人より祝詞傳句に

秋高し宗族輻輳大慈園
の一句は式典を一段と引き立たしめた感があつた。

「我が此の土は安穩にして天人常に充滿せり園林諸の堂園種々の實を以つて莊嚴せり」さながら佛國土の出現もさこそ思はれた式後記念撮影をなし終つて一祝祝宴に移り、土持住職の挨拶に來賓代表として陸軍少將杉村勇次郎閣下は「本日當院の開堂式に御招待を受けましたこと皆様に共に喜ばれたい次第であります、現代思想の混亂は殆んど救ふべからざる迄に至り政府は所有方法を以て之が改善に努力し、教化總動員と定になつたのであります、此の時に當り佛敎統一を理想とし、正統佛敎の法華經に依り立てる、顯本法華宗妙滿寺塔中當院に於て道場を改築莊嚴せられ、人心教化の實に邁進する事は誠に喜ばしきことで、吾が宗將來發展の爲に此の上もなき慶賀の至りである云々」との意味の祝辭があつた。一祝祝を盡し盛大裡に且つ嚴肅なる開堂式も五時半全く散會した。

尙本山部長の慶讃文次の如し

慶 讃 文
謹テ勸請シ奉ル本門古堂ノ大本尊來臨影響知

見顯聖アラセ給へ
維時昭和四年十月十三日宗祖御入滅ノ聖日ヲトシ總本山妙滿寺塔中塔中大慈院堂宇改築開堂入佛ノ式典ヲ奉ルニ當リ謹テ慶讃文ヲ捧ダ
傷々惟ルニ佛法東土日本ニ渡リテ年久シク堂塔雲ニ聳ヘ法音四方ニ響ク、八宗十宗爾爾美ヲ競フテ千數百年、我國文化ノ華ヲ飾ル七百餘ノ住僧、宗祖日蓮聖人出テ邪正ヲ匡シ名分ヲ論ジ佛敎統一ノ旗色鮮カニ鎌倉街頭ニ顯ル開祖日什正師出ルニ及ンテ外ハ權門邪法ヲ折伏シ室町將軍ニ治國ノ策ヲ獻シ、内ニ門下ノ歸正ノ企リ妙滿山妙滿寺ヲ創立シテ顯本法華ノ基礎ヲ立ツ、爾來春風秋雨五百餘年、釋尊ノ聖敎立正大師ノ正法獨リ我宗ニノミ存ス今ヤ時代ノ弊風其極ニ達シ、國本爲ニ危フカラントス教化總動員ノ起ルニ及ナキニアラズ思ヘバ世出二門ノ重寶繁リテ我等ノ双肩ニテ法鼓頻リニ響クズンバアラズ、心田深ク耕サレベカラズ、是ノ時ニ當リ大慈院住職土持住職並ニ檀信徒一結愛宗護法ノ至誠ヲ抽ンテ淨財ヲ集メ堂宇ヲ改築シ莊嚴ノ美ヲ調ヘ三寶諸尊ヲ奉安シ、内ニ門徒ノ信仰ヲ篤クシ、外ニ教化ノ實ヲ擧ゲントス、其善甚ダ善ク、其行深ク慶讃スベキ也

經曰乃至童子戲沙汰爲佛塔如是諸人等皆已成佛道

願クハ正法興隆國土安穩寺禮和合法統承繼乃至法界利益周遍
昭和四年十月十三日

總本山妙滿寺本山部長 岡崎英照 敬白
祝 辭
夫ニ寺院ハ社會教化ノ道場ニシテ人心安定ノ依止處ナリ、然ルニ當院ハ創立已來年古リ堂宇ノ頽廢腐朽甚ダシカリシヲ昨年之ガ改築ヲ企圖シ、爾來土持住職並ニ檀信徒一結努力奮勵ノ功空シカラズ、今ヤ工事竣成テ告ガ美觀ヲ呈スルニ至ル海ニ歡喜ニ堪ヘザルナリ本日茲ニ開堂ノ式典ヲ舉行スルニ當リ不肖本會代表シ謹ミテ祝意ヲ表ス
維時昭和四年十月十三日
顯本健兒會 廣 森 一 郎 (選會員記)

報

東京統一閣本部教報

△十月二十七日、晴(第四日曜)午後一時半開會、初めに法要讀經に講演、開會の辭櫻木顯正師次に「思想團體の眞相」と題して商學士中村清一氏次に「新魂の人」に就て磯部滿事氏最後に「彼岸と善行行」の題下に山口智光師の講演があつた。來會者五十餘名。

△十一月三日、晴(第一日曜)午後一時開會、當日は日曜講演に委れて法法思國會教化大講演會を開催す、講師は柴田一龍先生三吉顯隆師小西日野師本多日生現下他數名、委しくは屋外教化運動記に報す如下也

△全十日、雨(第二日曜)午後一時半開會、初

快著

里見岸雄先生新著

四六判三百頁箱入
ポブリオン表裝美本

定價金二圓

送料拾錢



大聖後六百十五年
斯界未會有の
革命的使命

「日蓮主義の新研究」聖典の新解釋「人間としての日蓮聖人」日蓮聖人の宗教と其實踐等を讀み世に問へる本書の著書は「法華經の研究」の脱稿を最後として、海外中の勞作たる厥文著書と二三の雜誌論文とを除くの外過去八年間、日蓮主義に就きては又何等積極的に語るところあらざりき、然るに今や俄然この長き沈黙を破つて新に天下に訴へんとする、是れ果して何事ぞ。
本書は日蓮學界過去の古典宗學のイデオロギイを克服し、且つ高く之を止提せんとしたる未曾有の快著にして大膽にあらゆる過去の古典宗學の如き痛快切實なる著述なし、觀念學者が、恐れつゝし、秘しかくしたる教義の秘奧は一々に尖鋭なる科學の解剖臺上に横たへられたり。
若しマルキシスト來つて「日蓮主義は何故現代社會に必要なりや」と問はんか、即時即刻起つて彼等をしてたゞ幾分たりとも首肯し得る程度に解して、種々の辯護、現代無用の長物也。本書は七百年の永き傳統的宗學の支持したる日蓮主義を觀念論の深淵より救ひ、之を徹底して現實社會的に把握したり。今や全日蓮主義者は本書を得て始めて始めて強敵マルキシストを克服する武器を確保せりといふべし。

京都平樂寺書店
五六一一版大替振

西里見研究會
六四九八七版大替振

京都體科學社發行
行六二一五八版大替振

■ 次取店書名著地各他其 ■

本多狷下の三大名著

法華經要義

法華經の教義を整束し極めて平易懇切に講述せられ、今回特に賜天覽、供臺覽、空前の好著なり。

四六判 六百數十頁
總振假名付
定價 金參圓

日蓮主義の心髓

法華經要義の姉妹篇なり、日蓮主義の精髓を領得せんと欲する者の必須欲くべからざる良書なり。

四六判 三百五十餘頁
總振假名付
定價 金壹圓八十錢

日蓮主義精要

十二篇に分類し教義信條の整束歸結を總説せるもの、日生狷下の妙悟紙上に躍如たり。

四六判 七百餘頁
總振假名付
定價 金參圓五十錢

「教」發行所

| 價定一統 | | |
|------|--------|--------|
| 一冊 | 半冊 | 一冊 |
| 金貳拾錢 | 金壹圓貳拾錢 | 金貳圓貳拾錢 |
| 送料五厘 | 送料共 | 送料共 |
| 事之金前 | 事之金前 | 事之金前 |

| 料告廣一統 | | |
|-------|------|-----|
| 表紙一頁 | 一頁 | 一頁 |
| 金貳拾錢 | 金拾五錢 | 金九錢 |
| 圓 | 圓 | 圓 |
| 前 | 之 | 事 |

昭和四年十一月廿四日印刷納本
昭和四年十二月二日發行 (第四百十七號)

不許複製

編輯兼 磯部滿事
發行人 鈴木日雄
印刷所 東京府花原郡品川町南品川百八十一番地
印刷所 都印刷所 電話高輪六〇二四番
東京府花原郡品川町南品川四百十二番地
編輯事務所ハ發行所ニテ取扱フ
振替東京五一〇七一番